
カティの畑

相野谷 華苑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カティの畑

【Nコード】

N5325R

【作者名】

相野谷 華苑

【あらすじ】

『カティの畑』それは神々に愛された庭だった。

そしてカティ自身も神々に愛され…愛され…非常に迷惑していた
マッドサイエンティストな薬学博士カティと天帝テロの恋はいかに
！？

登場人物（前書き）

登場人物を書き出してみました
多少説明項目にネタバレ感有りです

登場人物

＝登場人物＝

カティ・サトウ・サルメ・ライタ 人族

主人公 テロの嫁、天妃だが退位する為、地上に降りる。薬草の実る畑をこよなく愛している。薬学の知識は博士クラスで人に害の無い人体実験を繰り返す事から地上の街の人々には『マッドサイエンティスト』と恐れられていた。黒の髪と目、体型は胸の大きな口リータのよう

テロ・アールノ・ポウテイアイネン 神族

カティの夫、天帝。天界一の波動の持ち主。カティを溺愛しており、本来ならば結ばれる事の無い人の娘を無理矢理嫁に貰う。幼少の頃、波動を抑える魔草を使った治療を行っていたので瞳の色が右が金色・左が黒となっており、いつも左目は髪で隠している。髪は金髪で容姿端麗。

ウーゴ・アルヴィン・シェーブロム 神族

五帝の一人（地帝）一番帝の中では古株。カティの事は妹のように可愛がっている。波動は五帝の中では一番強く、結界を中心とした守備関連の術を使うのを得意とする。テロと同時期に帝につく。茶色の髪と瞳で温和な性格でそれを表す見た目。

アデライド・ニーナ・ラウタサロ 神族

五帝の一人（炎帝）初め人であるカティの事を嫌っていたが、一緒に過ごすうちにテロと同じくらい溺愛する事になる。天界でのカティの相談相手でもあったので、相談なく地上に降りられた事にショックを受けている。赤い髪と瞳の豊満な身体の持ち主。

マテイアス・アルピ・イーサツキ・アウヌラ 神族

五帝の一人（風帝）天界でカテイに（宮勤めの）妹を助けて貰った事がある。妹溺愛な人なので、それ以来カテイの事を認め、忠誠を誓った。青い髪と紫の瞳のインテリ美形。瞳の鋭さを中和するため眼鏡を愛用している

カンデラ・ピルヨ・ヴァハラ 神族

五帝の一人（水帝）雷帝と同時期に帝となる（シルヴオと幼なじみ）。幼い時に帝に選ばれ、宮で何もわからず戸惑っていた自分を助けてくれたカテイとアデライドを姉と慕う。金髪に青い瞳のフランス人形のように

シルヴオ・ヴィルツプ・リンコ 神族

五帝の一人（雷帝）水帝と共に帝となる（カンデラと幼なじみ）。動物が大好きで自分の雷獣を可愛がっている。その雷獣がカテイにとっても懐いているのでカテイの事も大好き
白髪に金色の瞳でぬいぐるみのような可愛らしさ。

アウノ・ケルツコ・クーストネン 神族

天帝の側近次官。カテイに退位を進めた人物。テロによって抜擢されたが、その過去の多くは謎に包まれた人物。灰色の髪に薄い金色の瞳で静かな立ち振る舞いをしている

ヴェイニ・ユツシ・カルツティアラ 魔族

魔界の皇帝。カテイの幼なじみ（テロよりも先に知り合っている）。長年カテイに片思いしていたが、全くカテイには通じていなかった。黒髪に紫の瞳で容姿端麗

ネストリ・イーサツキ・カルツティアラ 魔族

魔界の皇第二位の人物。流れからカティと主従の関係を結ぶ。兄の事を尊敬しているが、その兄をからかう事を趣味としている。兄と同じく黒髪に紫の瞳、兄より愛嬌のある顔をしている

ユホ・マウノ・テイエンスー 魔族

怒帝。流れからカティと主従関係を結ぶ。濃紺の髪に赤い瞳、ごつい見た目とは逆に繊細な魔具製作を作る。その技量は達人級

アネルマ・カステヘルミ・タイナ 創世神

創世神の二人のうちの一。相方が初代天帝と同化してしまった為、初代天妃となりその後初代天帝が亡くなると、息子の身体に眠り『天帝の銘』として後世の天妃の力となる

カティの畑

様々な色彩が咲き乱れる庭。

一見不調和に見えるそれは実に見事なバランスで安らぎを与える空間となっていた。

そこに咲く全てが薬草だとは信じられない見事な庭であった。

ただ…ここの持ち主カティ・サトウ・サルメ・ライタことカティは「ここは畑だっ！！！」と日々叫んでいる。

*

「…だから、何で毎日ここにくるんですか？」

燦々と光を降り注ぐ空を背景に、野良作業着のカティは目の前で優雅にお茶を飲む集団に声をかける

その集団から光が注がれているのではないだろうかというぐらい神々しい姿をした二人

神々しくて当たり前。なぜなら彼等はこの世界を統べる神達に他ならないのだから。

「だって、ここすごく落ち着くんだもの」

そう言うのは炎帝アデライド。

「そうなんだ。正しくこの庭はパラダイス」

アデライドの言葉に同意するのは地帝ウーゴ

そのいつもながらの返答にウンザリしながら、「いつか殺す」と呟

いてカティは止めていた鍬での作業を再開する
しかし神であるこの二人を人間のカティがどうこう出来るはずもない。

しかも神の中でも帝の称号を持つ者達なのだ。

「いつも素晴らしいね。カティの『庭』は」

「地上でこんなに神聖な空気が保たれてるなんて奇跡だわっ!!」

二人はカティに話しかけるのを一向に止めようとしなない。

カティは額の汗を首に掛けたタオルで拭いつつ、据わった目で睨む

「ここは畑だと…何度言ったら理解して頂けるんでしょうか？」

いくら据わった目で見られても、長い睫毛に縁取られた黒く大きな瞳は相手を怯えさせるどころか、きゅんとトキメかせてしまうものに他ならない

カティは顔にまわりつく漆黒の髪を軍手をはめた手の甲で払いながら麦わら帽をきちんと被り直す

その姿を見て神の二人は「くたびれたジャージをこんなに可愛く着こなせるのはカティしかない!」と、思ったのだった

「いつのまにか農道にテーブルセットは持ち込むわ…。日よけの建物は建つわ…」

俯いてしまったカティの表情は神の二人からは見えなくなったが、鍬を持つカティの手がふるふると震えているのを見ると今日は相当ご機嫌が悪いとわかる

「しかも日々それが増えて今じゃ農作業機械すら通れなくなってるっ!!しかも手伝いの人を雇おうにも何故かここには辿りつけない

しっ！！何ですかここは？秘境ですか？桃源郷ですか？」

「だつてえゝテロ様からの命めいなんですものお」

アデライドが言ったテロと言う名前にカティの口角がピクンと反応する

「テロ様がここには嚴重な結界を張ってるから普通の人は辿り着けないんだよね」

カティの口角がピクピクと反応しているが麦わら帽に遮られて神の二人にはみえない

今ここには居ない、だけど原因の元となっているテロにカティは殺意を覚える。

そうこの世界全てを統べるテロこと天帝テロ・アールノ・ポウティアイネンに。

「一回シメる」

「ダメだよ。天帝殺したらこの世界壊れちゃうよ？」

「そうよおゝ彼のご機嫌は今やカティ次第なんだから」

心の中で「そんな事知るかつ！」と思いつつ、けれど彼を怒らせると厄災が起こる事に思い当たる節がたくさんあるので無理矢理怒りを鎮めてまた黙々と作業にもどる

カティの畑？には日々入れ替わり立ち替わり神々が来訪する。そして今と同様の会話を繰り返すのだ。

カティは神々に『異様に』なつかれてありがた迷惑な思いをしている、どちらかというついてない人間なのだった

五帝

カティの畑は薬草に溢れている。

それは彼女が薬学の研究者だからであって、この畑は決して趣味などという物ではない。

「人が汗水垂らして一生懸命働いてる横で優雅にお茶ってどうよ？」
と言いたい言葉も相手が神なので言う事も出来ず、畑には（神の持ち込んだ物が邪魔で）大型の農耕機具は入れれず、先ほどの理由でもこの畑には近付けないので最終的には一人で畑を管理する事になり、本業の研究が滞りがちになり、カティのストレスは日々溜まる一方なのである。

そんなカティの気持ちも知らず、神の二人は会話を続ける

「カティも一緒にお茶でもいいか？」

「そうだよ。久しぶりにカティのハーブティが飲みたいな」

「申し訳ありません。『仕・事・中』です」

「残念」

つていうかお前も天界に帰れっ！！という雰囲気醸し出すのだが、神二人から見たカティは「可愛いvv」としか映らないのだった
「こんな二人はほっておいて自分の仕事をしよう！」カティはそう心に決めて、タオルを首元にしまつとまた鍬を振りかざす。

「あゝ！！アデリーにウーゴ！お前達も来てたのか？」

聞こえてくる声にカティの口から思わず「チッ！」と舌打ちが出る

「おお〜シルヴオじゃないか、それにマティとカンデラも」

「抜け駆けはするいぞっ！！」

はっはっはつと農道から笑い声があがる。

シルヴォは雷帝、マティアスは風帝、カンデラは水帝である。

つまりカティの畑に今世界の均衡を保つ五帝が勢揃いした事になる。五帝が勢揃いする事など大きな議会以外では天界でもめつたに見られない珍しい事だ。

彼等の和やかな空気の反対にカティの周りにはブリザードが吹雪いていて、カティは麦わら帽子の下での大きな溜息を吐くが農道の彼等に届く事はない。

彼等がそれぞれに引き連れた従者達の間にとよめきが混じる。

「たかがお茶しに来るだけに五帝が集まるなんて……」

有り得ない。

農道から聞こえた声に、誰の従者かはわからないがカティは「だよね？」と賞賛を送りたいと思った。

「カティ〜!!!」

お茶会に新たに加わった三人が手を振っている

それを視界の隅で見ながらカティは

「まじで…勘弁してよ」

と呟いたが、多分誰にも聞こえていない。

そしてどうしてあんなに人数がいるのに…畑に入ってるのは自分一人で誰も手伝ってはくれないんだろう？という素朴な疑問にはきつと誰も答えないんだろうなあ…と思ったりしているカティはこれから来るであろう最大の敵に対して、今までの事を座り込んでなかつ

た事にしたい衝動にかられるのだった

閑話 地帝ウーゴ 真逆の真実へそれ

一生懸命にカティが汗水垂らして農作業に明け暮れている頃。お互いの属性があるので五帝は一つのテーブルでそれぞれ決まった位置に着く。

丸いテーブルに地帝、水帝、風帝、雷帝、炎帝の順番に座る

「いつ見てもカティは可愛いわ」

そう言ったのは豊満な身体を隠す事なく紅い衣装に身を包んだ妖しい香りの漂う炎帝アデライド

「もう何て言うんだらう？食べちゃいたい？」

そう言うのは癖のある白髪のと大きな瞳を持ちぬいぐるみのように愛らしい雷帝シルヴオ

「とびきり甘い禁断の果実の香りだな」

同意するのは長い足を優雅に組み、青い髪と紫の鋭い視線を眼鏡で中和している風帝マティアス

「うふふっ 禁断の味ってそそられちゃう」

まるで中世の人形のような金髪に青い瞳の水帝カンデラの潤った唇に舌がちろりと見える

「ストップ！それ以上は危険区域！これ以上結界が増える様な事言わないように」

暴走しそうになる彼らを止めるのは、茶色の髪に同じ色の瞳を宿した安心感を与える地帝ウーゴの役目だった
そんな時彼らの視界に畑の中のカティが「ふい〜」と曲げていた腰を伸ばして額の汗を拭う仕草が見えた

「萌えるわ〜」

「可愛すぎるうう」

「連れ去りたいな」

「お姉様〜」

一斉に上がる声にウーゴは頭を抱えなくなる

「お前らなあ〜」

ちらつとウーゴがテーブルの周りを見渡すとそれぞれの従者が控えている。

こんな五帝の会話を聞かれてはまずいと思って咄嗟に張った結界が効いているのか、さきほどと同じように佇んでいるのを見てほつとウーゴは息を吐き出した。

従者のそれぞれの瞳が熱い視線を発してテーブルを囲む神を見ているが、それは会話とは関係ない物。

五帝は何と言つても天界での憧れの的であり、自分が仕える主人以外の帝を見る機会などそうはない

しかし五帝が揃った時の波動は凄まじく、普段からそれぞれの帝の波動を浴びている彼らなので立っていられるが、普通の従者ならばすでに失神しているだろう

いやこうして常に側にいる従者でさえ五帝が揃った波動にはウーゴが張った結界無しでは耐えられないだろう

ただそんな従者達の心配をしているのはウーゴだけで、後の四帝は

気にもかけない。

そんな彼の苦労も知らず、四帝の視線が一気にウーゴに向けられる

「忌々しいわ…あの結界」

「あれのせいでボクらカティに近づけないんだもんね」

「無理するとカティを傷つけてしまうからな…」

「もっとお姉様に近づきたいのに」

実はカティの周りには彼女を中心に半径1メートル程の強力な結界が張られている

もちろん四帝が破れないほどの結界を張ったのは、同様の力を持ったウーゴその本人である

「天帝の勅命なんだから仕様がないだろ？」

守護に関して地帝を上回る力を持つものは居ない。

そしてそれ以上に彼らを縛るのは『天帝』というその二文字。

「……うう」「……」

四帝のそれぞれの顔を見てウーゴは思わず苦笑してしまう

そして彼自身も『天帝』という言葉に縛られている

カティの周りに結界を張ったのはウーゴだが、しかし彼もカティ自身には触れる事は出来ない

四帝はウーゴが彼らに対してカティの周りに結界を張っていると思っ
っているが、実は真逆な『^{それ}真実』。

それは身に纏う薄衣のようにカティの周りにある『^{それ}真実』

彼女に関するものは髪一本誰にも触れさせないという意図が明白な
『それ 眞実』

五帝ですら瞬時に消してしまつてあつて恐ろしいほどの『それ 眞実』

彼女自身纏っている事を気付いていない『それ 眞実』

「全く恐ろしい神だ…」

呟いたウーゴは先程までとは違う少し強ばつた表情をしている
そんなウーゴの表情をカティに夢中な他の帝には気付かない

天帝に従いし五帝その中でも最も古株の地帝ウーゴ。彼は平和を望
み、そして四帝を大事な仲間と大切にしている

『全てを守る』

その為の少しの誤解。

「ウーゴの馬鹿」

「雷獣飼つてみる？」

「風剣の餌食になるか？」

「ウーゴ兄様なんて大嫌い」

そうして彼は今日も四帝の嫉妬を受ける。

彼らを守るなら些細な事。

にこりと彼らと戯れ言を交わす日常。ウーゴはそれも幸せに感じるのだった。

でもそんな優しいウーゴだからこそ役得があり、カティが彼だけに気を許す時がある。

カティの気分によつて真実^{それ}は臨機応変に対応するらしく、ウーゴだけで畑を訪れた時にはカティが特別な極上ハーブティをいれてくれるのだ。

「ま。役得だな」

ウーゴが呟いた言葉に本当の意味は知らない四帝がそれぞれ「きい
くー！」と怒りを表しているのを彼はやっぱり笑って見守るのだった

閑話 地帝ウーゴ 真逆の真実へそれ（後書き）

地帝ウーゴの話です。彼の名はウーゴ・アルヴィン・シエープロムと言います。

五帝の中で一番お兄ちゃんです。

そして一番の平和主義者です。

うん！五帝の掛け合いを書くのは楽しい！！

ってかまだ出てこない天帝テロのイメージが（苦笑）

お気に入り登録が50件こえました！嬉しいです！！

ありがとうございますvv

天帝降臨

「ふう〜」と息を吐きながらカティは曲げていた腰を伸ばす。目の前に広がる畝の仕上がりは納得し、ここに植える薬草を考える。

「アルメアの在庫が減っていたからなあ…」

薬学師の研究といっても元手が必要で、カティは簡単な傷薬などの薬草を調合しては街の薬師に卸していた
アルメアとは細胞再生を活性化させる薬草で、傷薬や回復薬として重宝されておりカティの大事な収入源だった
アルメアは成長速度が早い薬草としても有名で一ヶ月ほどで収穫出来る葉をつける、しかしその反面育成がとても難しい薬草とされていた。

「よし！アルメアにしよう！」

カティは薬草を調合する技術も素晴らしいのだが、薬草自体を育てる技術も一流だった。
野草を手に入れては自分の畑で育てており、周りの学者には一目置かれていた。
考え事していると周りの見えないカティだったが、背筋にぞくりと悪寒が走る

「げっ…」

感じたそれはカティがよく知っている明らかに『彼だけの』波動で、カティは畑仕事に夢中になっていた自分に叱咤しつつ、慌てて周りの波動を探る

思いのほか身近に感じられて、慌てて逃げようとした所を後から抱きとめられる。

「カティ」

そういうと天帝テロは後から抱きしめたカティの首筋に軽いキスを落とす

「!!!!????」

カティは軽い舌打ちをしてテロから離れようとするが、背後からしつかりテロに抱きしめられておりすべては無駄な努力となる。

カティが背後から感じる波動はそこにいる五帝の波動などとは比べ物にならない物。

普段神族は天界から地上に降りる際に自分の波動を抑えて降りるのだが、どうみてもテロの波動は天界での波動のままだった。

先程とは違った意味で舌打ちを打つと、ウーゴに向かって叫ぶ

「ウーゴ!!!早く私ごと結界で覆って!!!!」

突然現れた天帝の存在に五帝は茫然としていたが、カティの言葉にハッとウーゴが動く

それと同時にカティとテロの周りに空気の揺れが生じ結界が張られた。

テロは一瞬それを見たが、どうでも良い事のようにカティに意識を戻す

「テロ!!!離してつ!!!!」

「却下だ。どうして逃げる?」

一向に腕の中に落ち着かないカティに少し機嫌が悪くなったテロが低い声で答える

カティは暴れるのを止めて、顔だけをテロの方へ向けた

「そんなに波動を纏って地上へ下りて来て何も影響が無いとお思いですか？」

「ウーゴがすぐに対応しただろ。それにここは私自身の結界で覆われてるから地上に問題はない」

「すぐ側に五帝の従者達が居ります」

五帝は天帝の波動を受けても平気だが、従者はそうはいかない。

それだけでなく五帝が揃った波動で少なからず影響がある所に天界での天帝の波動など受け止められるはずがなく、人で言うところの脳へ莫大な情報量が一気に流れ込むような感覚に気を違えてしまう。カティが心配そうに農道の方を見やると、すぐにウーゴに結界を張る様に言ったので見た所大丈夫な様子だった

カティはその代わり目の前に異様な光景を見る事になる。農道に全ての神族が五帝も含めて全員跪いてる姿。

「テ…陛下」

「そんな呼び方はよせ」

「そうはいきません」

カティは農道の神族と同じように天帝に対して跪かなければならない。

しかしテロがカティを離す気配は一向にない。
だんだんとカティの額が熱くなる。

「くっ…はっ…早…く離して…」

手で額を抑えて意識下にそれを戻そうとするが上手くいかず、徐々に額に輝く紋章が浮かび上がる。

カティが天帝の波動の中でも平気な理由

「駄目だよ。愛しい我が妃」

「も…『元』妃です…から」

カティの額の紋章。

それは天帝妃の証『天帝の銘』だった

天帝降臨（後書き）

おっ！やっと天帝登場！

そして実はカティは元『妃』（テロにとっては『妃』（）なのでした！

『元』妃なので五帝に対しても下手に出ていたのです

天帝の銘

「僕の妃になつて貰えますか？」

天帝ではなく、テロ個人として人のカティを望んでくれた事を彼女は喜んだ

「天帝の銘」

それを身体に受入れた時、カティは幸せだった。

「カティの全てを手に入れたい」

初めての夜、全てに優しくかった彼に涙した

*

その歯車が狂いだしたのはいつからだったのかカティにもわからない

「人と神との婚姻など…汚らわしい」

「やはり妃が人であるから、子が授からないのではないか？」

「何も持たない人ごときが天界に上がるなど…神域が乱れるわ」

そんな天界人の最初は気にならなかった言葉が、カティの心を徐々に蝕んでいった

地上にいた頃の仕事も天界ではさせてもらえない。

「妃が土いじりなどもつてのほかです」

「もつと天帝を支える何かを考えて下さいませ」
「薬学など波動の元には不要ですわ」

ただ天帝に仕えるだけの日々。

幸せだった彼との行為が、いつしか義務になる
かけられる言葉に怯え、多忙な天帝に対しての面会も段々と回数を
減らしていき、カティは部屋に籠る日々が続いた

「私は…、何の為に」

ココニイルノ？

ベットの上で何処を見るでもない様子のカティに、侍女が心配して
天帝の側近であったアウノに報告した

その時アウノに言われた言葉にカティは逃げ道を見つけてしまった

「『天帝の銘』を返還してはいかがですか？」

「そんな事が可能なの？」

壊れかけたカティの心にはそれは甘美な薬だった。

「議会に承認して頂ければ、少なくともカティ様は地上に戻る事は
出来るはずです」

天帝の力で全てを統べていても、賢帝でもあるテロは独裁を良しと
はしておらず、天界には五帝を筆頭とした各属性の長老からなる議
会があった

カティが天界に来て10年。

その間一度も地上に戻った事はない。

何度か「一度戻りたい」と天帝に申し出たが、いつも受入れて貰えなかった

「帰れる…の？」

「天界はカティ様の帰す所ではないようですので」

「…そうね」

アウノは淡々と語る。

少しでもカティを慰めての言葉だったら、彼女は受入れられなかったかもしれない。

「次の議会の招集はいつ？」

「いつでも。天帝妃としての力をお使い下さい」

「そう…。反対する者がいない時がいいわね」

五帝がカティの事を気にかけている事はわかっていた。

ならば彼らが出席出来ない時が良いとカティは思う

「天帝と五帝が不在の時に招集を」

「御意」

アウノが退出した後、カティはテラスへの扉を開けた。

吹き抜ける風に靄がかかっていたカティの頭が少しずつ動き出す

「テロはきつと反対するわね…」

でも、もうここに留まる事は出来ないと、一度何もかもをリセットするべきだとカティは思う。

「どうやって説得するか…よね？」

強い風がカティの真っ直ぐな黒髪を攫う。

その時その髪の毛の先のベットのサイドテーブルに目が止まる。

彼女が地上から持ってきたものが全部そこに納められている。

「…薬？」

薬学博士だったカティが地上から持って来た唯一の薬。

「魔薬」

それはカティとテロを結びつけた大事な薬だった

天帝の銘（後書き）

少し過去のお話です。もう少しテロとカティの過去を書きたいんですけど…

何だか説明チツクになりそうなので詳しくは閑話などで補充していきたいと思います

お気に入りか100件を超えました。

読んで頂ける皆様がいるというのはやる気倍増になります！

退位

「魔…薬」

カティは導かれるようにサイドテーブルの引き出しから小さな瓶を手に取る。

魔薬、カティが開発したこの地上で唯一神の波動を抑える事が出来る薬

それは天界の者には決して作る事が出来ない『魔』の力を含んだ薬。彼女がまだ地上にいた頃、魔の森から取って来た植物の根とアルメアの葉、天界の聖水を調合し出来た偶然の産物だった

しかしこの薬は悪用されれば天界が大混乱になる為にテロが結婚の際にほとんど処分してしまったはずだったが、その際に一瓶だけテロの目を盗みカティは研究の為に手元に置いておいた

「これを…飲めば…帰れるかな…」

昔、諸事情で神族のテロにカティがこの薬を飲ませた事があった。人であるカティがこれを飲むとどういう副作用が出るかはわからない。

ただ、そんな事はどうでもいいと思えるほどカティは追いつめられていた。

『コン・コン』

部屋の扉がノックされる音に、カティはビクツと身体を反応させる。慌てて手にした魔薬の瓶をゆったりとした袖口に隠す

「どござ…」

両手を前で組んだ侍女が頭を下げて部屋に入ってくる

「天妃様、アウノ様より『明日の五の刻に』と伝言を承りました」

「明日…」

今しがた話したばかりの事なのにとカティは思うが、それほど天帝を慕うアウノは天帝の役に立たないカティを嫌っていたのだろうと納得し苦笑する

「もう引き返す事は出来ない」とカティは一つ息を「ふう」と吐くと、キツと視線を真つ直ぐ窓へ向ける

「明日、議会が行われるという事は今日はテロも五帝もここにはいない」と心の声で呟き、明日の自分に対してカティは作戦を練りだした

*

次の日。

ざわつく謁見室には各長老達が椅子に座り落ち着かない様子だった居るはずの天帝、五帝の姿が見えない事で一体何の為の議会なのか皆わからず戸惑っているようだった

そこに天帝側近のアウノの声が響き渡る

「カティ天帝妃様おなりです」

一気にざわめきが膨れ上がり、そして扉が開くのと同時に音が消えるそしてまたアウノが声を出す、今度は先程とは違い地を這うよう

な声だった

「天帝妃の謁見に着席のままとは？」

慌てた長老達は立ち上がり、両手を前に組んで頭を下げる

その中をカティは必死に自分を奮い立たせ開いた扉から真っ直ぐ前を向いて、玉座に向かう

カティは侍女に衣を整えて貰いながら玉座に座り、顔を伏せている長老達に声をかける

カティの澄んだ声が謁見室に響く

「面おもてを上げて下さい。今日は忙しい中、私事の為にお集まり頂き有り難うございます」

この謁見もカティの天界での慣れない事の一つだった。

いくら周りの者に言葉を直すように言われても、神々に対しての恐縮は拭う事が出来ずこうして丁寧な口調になってしまつのはどうしようもなかった

カティの言葉に長老達は顔を上げ、目の前にいるカティへ視線を向ける

天帝の唯一の妃。滅多に表に出てこない妃。

それは漆黒の髪と瞳を持ったまるで人形のような容姿をした人。

その姿に思わず眼を奪われてしまった長老達は言葉を誰一人発する事が出来ない

だが、カティに反する心を持ったものがいち早く自分を取り戻すとカティに対して言葉をかける

「天帝妃。本日はどのような議を？」

「…」

「天帝も五帝も居らぬ中の議会。それは余程の事情がおりなので

しょうなあ」

「いやはや、いたずらに議会を呼び出されたのではたまったもんでありませんなあ」

カティを認めぬ者達が次々と言葉を繋ぐ

カティはじつと彼等の言葉を聞いていた。そして彼等も一通り言い尽くしたのか、謁見室に沈黙が流れた所でカティが話しだす

「先程私事と言いましたが、私『天帝の銘』を返還しようと思いません」

何が起こったのかわからない一同。

彼等の耳にカティの言葉が届いていたにも関わらず、その言葉を処理する事が出来ない

沈黙を肯定と取る事にしたカティは言葉を続ける

「つまり妃を辞めて地上に戻ります」

「つつつ!!!」

「私の事を天帝の役に立てない妃だと思いなのも存じております。その通りです。ですので次の妃には是非天帝のお力になれる方を望みます。そして皆様にはこれからも陛下の事を支えて下さいます様よろしくお願いいたします」

そういうとカティは玉座から立ち上がり、頭を下げる

「お待ち下さい!!! 妃様」

「？」

「このような一大事は…、天帝、五帝のいる所で無くては結審出来かねます」

多少自分の事を思ってくれてる神が居る事にほんのりカティの胸が熱くなる。

ただその事に流されてここで退く訳にはいかないとカティは気を引き締めた

「ですが私も現在天帝妃の身、結審は私にも可能なはずです」

「しかし…」

「天帝はお優しい方です。このままでは陛下の為になりません。陛下の為なのです承知して下さい」

陛下の為と言われてはその後の言葉が繋げない。

そして元よりカティの事を認めていなかった者達はここぞとばかりに、賛成の意を掲げている

「それでは皆様。退位ご承知頂けたと理解し、結審させて頂きます」

一度立ち上がった玉座に再び座る事なく、カティは目の前の扉に向かって歩きだす

慌てて長老達が顔を下げる

カティは先程反対の意を唱えてくれた長老のところで立ち止まるとそっと「我俣を通してすみませんでした」と耳打ちした

そしてその先は立ち止まる事なく扉まで向かう。

扉まで来ると側にアウノが控えていた。

「陛下はいつ戻られますか？」

「明後日には」

「では今日中に地上に降ります」

「…御意」

「私の侍女達の今後は悪いようにしないで下さいね」

「御意」

「アウノ様…有り難う」
「……………」

それから部屋に戻ったカティは今まで仕えてくれた侍女達に労いの言葉をかけ、まるで旋風のように供も付けず王宮から地上へと降りたのだった

退位（後書き）

お気に入りが入りが150件をこえました（涙）
ありがとうございます！！！！

地上、実家へ

地上に降りたカティを最初に迎えたのは荒れ果てた畑だった。

天界と地上とは時間軸が違い、天界での1年が10年となる、カティは天界で10年過ごしたのでほぼ100年地上から遠ざかっていた事になる

もちろん地上にいた頃のカティの家族・知人などはすでにいない。

「…家、まだ残ってたんだ」

目の前にはカティの記憶よりは廃れたかつての実家。

今は人の気配がない。

カティの母が亡くなり、父がそれを追いかけるように亡くなったのは地上の時間で30年前。

それ以来この家には誰も住んでいない様子だった。

まるで、不法侵入するようにびくびくしながら玄関に向かう。ドアノブに手をかけると鍵がかかっていなかったのかガチャツと音を立てて開く

部屋はカビとホコリの匂いの中、微かに懐かしい香りが漂う。

その香りに地上で生活していた頃の記憶が蘇った。

「またここで暮らす事になるなんて思わなかったな。…あのときちゃんとケジメつけたと思ってたのに…」

天界に向かう時に割りきったはずの心にヒビが入る。

「感傷に浸ってる場合じゃないや。片付けないと…」

アウノは天帝が帰ってくるのは明後日だと言った。

という事は地上ではおよそ20日後、それまでに地上の生活を最低限の物にしておかなければテロは直ぐさまカティを天界に連れ戻すだろう

「とりあえず…寝る場所と、台所…かな？」

2階への階段は所々穴があいており、カティの頭の中に大工仕事も加えられる。

この調子だと屋根も穴あいてるかもなあ…と考えながら階段の穴を避けて自分の部屋だった場所に向かう

「テロの波動で『えいつ！』てやったら壊れそうだ」

くすくすと笑いながら2階の廊下を歩いていると、『ズガアアアン』と一階から凄まじい爆音が聞こえてきた

「…え？」

カティの目の前にモクモクと上がる粉塵。

突然の事にカティはその煙を思いつきり吸い込んでしまって「コホッコホッ」と咽せた。

階下にドカドカと聞こえる複数の足音に「まさかこんな空き家に盗賊なんて…」と、カティは迫り来る恐怖に身を縮ませてしまう。

「陛下。落ち着いて下さい。天妃様に怪我があつては…」

聞こえてきたのはここに居るはずの無いウーゴの声。

「人の気配などすぐにわかる。1階（ここ）に人はいない」

聞こえてきた声と、煙の向こうに微かに見えるブラチナブロンドの髪。

カティは首を左右に振りながら思わず吹き抜けの手すりから壁際まで後ずさる。

「テ…ロ？」

カティの思考が停止する。

テロはその眩きすらも聞き逃さなかった。すぐに2階の廊下へ視線を向けると身体を宙に浮かべた

今の状況でテロと会うわけにはいかないと、早く逃げなくてはいけないと頭ではわかっているがカティの足は動かない

テロは2階の壁際にカティの姿を見つけると静かに側に足を降ろした

「カティ？」

「な…んで？だって…テロの帰りは明後日だって…」

カティの声が震える。

「そう？…私は一時でも早く愛しい妻に会いたくてね。なのに、帰れば訳のわからない議会によって妻が地上に帰ったと報告された」

静かにテロは話を続けているが、カティは彼がかなり怒りを抑えている事がわかった

カティは冷静に説明をしなくてはならない事はわかっているが、喉に何かが詰まって声が出ない。

「カティ。これは？」

「……」

「『ちよっと』した悪戯かな？」

テロは少しずつつカティに近づき、壁に凭れるカティの顔の両サイドに手をつく

近づくテロにカティは怯えてしまいそうになる気力を必死に保つ。

先程気管に入った煙がまだ気持ち悪いが、「…あ」と声が出る事を確認して目の前に迫った顔に視線を向ける

カティは思い切り息を吸い込んで一気に話そうと声を出した

「あの！」

「離縁して下さい」と言おうとした途端、階下から凄まじい火柱・水柱が上がった

「ちっ」と軽い舌打ちをするとテロはカティに聞こえないほどの声で何かを呟き、カティを抱きこんでその炎と水からカティを守るあつと言う間に消し去られた実家の屋根に、ばくばくと口を開閉させるカティはまた言葉を無くしてしまう

テロとカティの耳に階下からアライドとカンデラの言葉が聞こえてくる

「カティィィィィ・お姉様あああ」

しかしカティは突然起こった全ての事に頭が追いつかず、ここ数日の睡眠不足もあってテロに抱えられた腕の中でゆらりと意識をなくした

「カティィィィィ？」

「ウーゴー！そいつらを結界で縛り付けておけっっ！それと医者だっ！！」

テロは腕の中で気を失ったカティを一度強くぎゅっと抱きしめると、

すぐに横抱きにして浮き上がりあいた天井部分から外へと向かった
カティがその腕の中で安らかな顔で眠っていた事には気付かなかった
た

地上、実家へ（後書き）

カティの実家なのに…（苦笑）

なんと！お気に入り登録がどんどん増えていった（感涙）

やはり自分の愛しいキャラ達なので皆様にもそう思ってもらえると嬉しいですvv

現実

額に冷やりとした物が置かれる感覚にカティが薄く目を開ける。
カティの目の前には青い空、それと心配そうにこちらを覗くウーゴの顔だった

「うう…」

「天妃様？お気づきですか？」

あきらかにほっとした顔のウーゴにカティは自分が気を失っていた事を思い出した
そしてそこに感じる違和感

「……テロは？」

「陛下はあの『バカ共』がここで波動をめちゃくちゃに使ったんで、地上への影響を最小限に抑える為に一度天界に戻られています」

ウーゴが『バカ共』と言った時に向けた視線の先には、二人の場所からかなり離れた所に結界の綺麗な小型ドームが出来ている
それらが色取り取りなのは中からそれぞれの帝が自分の波動でなんとかそのドームを壊そうとしているからだだった。

一緒に中から「カティー」や「ウーゴおお」などの騒がしい声も聞こえるが、カティは無視する事にした

「ウーゴ…手貸して」

カティが起き上がるうとするのをウーゴが支える

カティにとっても五帝と同じようにウーゴは兄だった。

いつも影から自分を支えてくれていた存在に、カティは何の相談も

しなかった事を後悔した

が出した結論はカティの中で揺らいでない。

ウーゴの心配そうな瞳を見て、説明しなくちゃとカティは思う、ただ自分から言い出しにくくて少しずるい手を使った

「…理由…聞かないの？」

カティを支えるウーゴの手がピクリと反応する。

ウーゴの中では今凄まじい葛藤が起こっている、彼も他の五帝と同様、カティの事が大好きだ。

しかし今のこの彼女のやつれた状況を見ると余程思い悩んで今回の事を実行したんだろうという事がわかるだけに安易に踏み込めなかった

ただこのままでは、何も解決しない事もわかる
なのでウーゴはカティに静かに話しかけた。

「議会に『天帝の銘』の返還を持ちかけたのは本当ですか？」

「………本当」

俯きながら答えるカティの肩が震えているのがウーゴから見えた
しかしウーゴは敢えてキツイ言葉でカティを責める

「では、陛下をお捨てになるつもりですか？」

「捨てるなんてっ！！！」

カティの今にも涙が溢れんばかりの潤んだ瞳がぱつとウーゴに向けられる

ウーゴはこれからカティに言わなくてはならない現実「ふう…」
と大きく溜息をついた

「カティ、よく聞いて下さい」

『天妃』ではなく、『カティ』と昔のように呼ぶウーゴはまるで先生のように話始めた。

「議会に返還を申し出たんだよね？じゃあその議会がどうなったのかわかるかい？」

ウーゴから出された質問の意図が解らずにカティは首を傾げる。
カティを嫌な予感が襲う

「テロ様より先に僕ら五帝が王宮に戻ると、それは嬉しそうに議会の事を告げてきた長老達が居てね」

『やっと邪魔な人間が居なくなりましたぞ』

『天帝妃に人間がなるなど…忌々しい人間が居なくなって清清しました』

『やあ〜人間が居なくなるとこも天界の空気が澄む物ですなあ〜』
耳障りな言葉がウーゴの頭に響き、怒りが再燃しそうになるのを理性で留める。

このような言葉をカティに伝えるつもりは毛頭ない。

「すぐその場にいたあいつらによって消された。言ってる意味わかる？」

「え…？」

「アデリーは灼熱の炎出して身体を焼き付くし、カンデラは氷で串刺しにしてたな。マティが切り刻んで、シルヴォが落雷で全て消し去った」

蒼白になったカティの顔色を見て、ウーゴの心がツキンツツと痛むが

ここで止めるわけにはいかなかった

「そ…んな、…長老に…なんて…事…」

「僕らは当然の事をしただけだ」

カティが震える口元を手で覆い、そしてハッと自分の考えを口にした

「そう…よ。ウーゴなら…結界で…助けてあげられたのよね…」

「…なぜ？大事なカティを僕らの居ない間に勝手に勝手に天界から追い出した愚か者をどうして助けなくてはならない？」

「追い出したわけじゃないわっ！」

「そうだね。だから、カティにも辛いだろうけど現実をわかってもらおう」

「現…実？」

今から話す事に、ウーゴは思い出しても恐怖で身体が竦む

「陛下はそれからすぐに戻られた。まあ複数の長老の気配が一瞬にして消えたからだろうね。そして何事があったかをすぐ把握された途端、地上から1000の島と1000種以上の生物が消えた」

「ひいっ！」

カティの顔色が蒼白だったのが、もう色を無くしている。

一瞬の怒りだけでそれだけの被害を出してしまうテロをウーゴは怖いと思う。しかしそれと同時にその神々しい姿に尊厳を抱く。

『卿等は何を勘違いしている？長老という名に何を求めたのだ』議会に対してテロが言った言葉はこれだけだった

「元々この世界に長老の力なんて必要ない。ただ統制を取りやすくする為だけの物にカティをどうこうする資格なんてないんだよ。せ

つかく名の有った神族の末裔だから与えられたのにね。」

「……」

「怖い？でもカティを愛してるのはそういう者達だ。カティの考えが安易だとは思わない。だけど僕らにとってテロ様とカティが全てなんだよ」

天帝の妃になるという事。

それをカティは本質ではわかっていなかったのかもしれない。

彼女にとっては大好きなテロと一緒に居られる、それだけだったから。

なのでカティは今聞いて、起こった事が自分の事のように思えない。でも自分がした決断によって犠牲になる人が出てしまったのは事実だ。

「ごめんなさい…ごめんなさい」

流れる涙を拭う事もせず、ただ手を組んでひたすら謝り続けるカティ。

それを困ったように見つめるウーゴ

「…離縁なんて言ったらどうなるか…理解して貰えた？」

カティがコクコクと頷く

「……でも…あたし天界にはいられない」

「…そうだな」

今のカティが天界に戻っても同じ事。もしかしたら悪くなる可能性もある。

ウーゴはそれなら少し地上でゆっくりして元気になってもらう方が

いいと判断した

「なら暫く地上じじでしばらくゆっくりするのはどう？」

「え？…それで…いいの？」

「『離縁』という言葉を使わないのであれば、僕が責任持ってカティを地上で静養させてあげる」

ウーゴの言葉をカティは信じた

そして、カティ天帝妃が静養と薬の研究の為、地上に降りるといふ声明がその日のうちに天界を駆け巡った

深い愛で見守る

カティとウーゴの会話からしばらくして、天界から地上へと戻ったテロはウーゴからの報告に耳を傾けた。

少し離れた場所にいたカティは二人の周りの温度がどんどん下がっていくのが感じられたが、「僕にまかせて」とウーゴが言った手前動けずにいた

「…ここに残るだど？」

「御意」

「却下だ。カティは連れ帰る」

「陛下、天妃様はあのまま天界にいては精神を病んでしまわれます。一度地上で静養して頂きたいのです」

ウーゴの言葉にテロの美しい顔が歪む。

テロも事が起こる前のカティを見ているだけに、ウーゴの言葉を無下に出来ない。

カティは病み始めてから、まずテロの目を見なくなり、地上では元気づきるほどだったのにどんどん内に籠ってしまった

伽の際にも前まで愛らしく微笑んでいたのが、最近では何かに耐えるように眉間に皺を寄せている事が多くなった

徐々に自身と距離を置くカティに焦り、彼女が閉じこもる部屋に足繁く通えば更に態度が硬化していく。

テロは為す術がなかった。

しかし、カティを自身から離す事を考えると、想像しただけで身を裂く痛みが襲う

「無理だ」

「…陛下」

「どうしてもというなら、私も地上へ降りる」

「陛下、そんな事をすれば波動の影響で地上がどうなるかわかっていらっしやるでしょう。それでは天妃様が安穏な暮らしをして頂けません」

「では、私にどうしろというんだ…」

「穏やかに見守って差し上げるのも、深い愛だと思われませんか？」

——見守る？側に居らずにどうやって見守れと言った。嫌だっ

！カティは私のものだ。誰にも触れさせない！私だけを見つめていればいいのだ！

テロの激しい思いが彼の中に濁流のように流れているが、それを口にするには彼は賢帝すぎた

体中から見えない血飛沫をあげながらテロは考えている事とは逆の言葉を口にする

「わかった、ただし期間は地上時にして5年。それと天界時で一日一度訪問する。これ以上の譲歩はしない」

「陛下…有り難うございます」

ウーゴが腕を全面で組んで深く頭を下げる。

ウーゴから視線を外し、テロはこちらの成り行きを熱く見守るカティにふと目を向けた、そしてカティの身体に纏うものを見て一番の問題を思い出す

「しかしカティが地上に居るには今のままでは問題があるか？それはどうするつもりだ？」

「…は？」

テロは再びウーゴに視線を向けると、彼に解るように手で額を指差す

「あ……」

ウーゴはテロに言われ顔を青ざめた、すっかりその事を失念していたのである

「『天帝の銘』」

「そつだ、我が妃は私よりは劣るがそれなりの波動を纏っているが？」

ウーゴは恐る恐る思った事を口にしてみる

「陛下…『天帝の銘』を消す…」

『チャキン』

いつの間に抜いたのかウーゴにはわからないほどの早さで、テロの剣先がウーゴの喉元に当てられる

「私にお前を殺させるな……」

「申し訳…ありません……」

「ウーゴっ!!」

その二人の姿を見てカティが慌てて側に寄ってくる
ウーゴに抱きつこうとするカティの腰をテロが抱え込む

「テロっ!!!!」

「それ以上近づくな」

「じゃあ、その剣納めて!!」

カティの言葉にテロはウーゴに向けていた剣を鞘に戻した
よほど息を詰めていたのかウーゴの身体から力がフツと抜ける

「…ダメだったの？」

テロの腕の中のカティがウーゴへ問いかける。

今の現場を見たからだろう諦めの色が見える問いかけだった

「いえ、期限付きですが陛下は天妃様が地上に居る事を了承して下さいました」

それを聞いた途端カティの顔に満面の笑みが浮かぶ

「ほん…と」

「はい」

「テロっ！！！！ありがとうっ！！！！」

カティはテロの腕の中で身体を反転させると思い切り首元に抱きついた

テロは久しぶりの妻からの包容に感動しつつ、カティを抱いた腕に力を込めてぎゅっと抱きしめる

「カティ…」

甘く香るカティの首元をテロの唇が辿る。

そのまま先に進もうとした瞬間、「ゴホンっ」とウーゴが咳払いをした

カティの意識がそちらに向くのがわかり、テロはちっと舌打ちをする

「天妃様」

「ウーゴ？」

「しかし今のままでは地上でお暮らし頂くわけにはいかないんです」
「…え？」

妃の波動といえは五帝と同様の力を持つ。

波動を纏った神族は幼少からその力を制御する術を身につけているが、カティは如何せん人間なので自分の中にある波動の制御が出来ない

天界ではあまり王宮から出なかつた事と、人と謁見する際にはいつもカティの波動をテロが側で制御していたのである
一通り説明するとカティの眉間の皺がどんどん深くなっていく

「むううう。…テロ、これ消してよ」

カティは話を聞きながら額の『天帝の銘』を手で擦っていたので、その部分が赤くなっている。

「駄目だ。それだけは絶対に認めない」

『天帝の銘』を消す。

それは離縁と同様で、そんな事をテロがカティに出来るわけがない、それをウーゴも重々承知しているので無理は言えない。

カティには申し訳ないが、恐ろしくてカティを失った天帝の姿など想像もしたくない。

諦めの空気がその場に充満した時。

カティがテロの腕の中でもぞもぞと動いた

「テロ。ちよつと離して」

最終的にテロはカティが自分の腕の中に帰ってくる事に満足したの

か素直に腕の中から彼女を解放する
カティは二人から少し離れた所に立つと、ごそごそと自分の袖の中
で何かを探している

「カティ？何をしている…」

「ちよつと黙つてて」

「……」

後にも先にも天帝に対してこのような口調で話せるのはカティだけ
だとウーゴは側で思う

機嫌が悪くなつてないかとウーゴはちらりと天帝に視線をむけるが、
そこには優しく微笑む姿があるだけだった

テロにしてみればこの口調こそ、最近のカティにはなかった昔の面
影、テロの愛しい人そのものだった

「あつたっ！！！」

天帝とウーゴが見守る中、カティは袖から小さな小瓶を取り出した
それを見た瞬間、今までとは一変してテロの表情が消える

「カティ」

「おつと。近寄らないでね」

側に向かおうとするテロにカティは手で牽制する

「それは全部処分したはずだ。なぜ持っている？」

「なんとなく？研究したかつたし…」

ウーゴは二人の会話についていけずただ成り行きを見守っている
じりじりとテロはカティの方へ近づくが、カティも同じように離れ

ていく

「渡しなさい」

「やうだ」

「カティ…」

「これ飲めばきつとあたしの波動、抑えられるよね？」

カティは返事を聞かずに行動した。

瓶の蓋を片手で外し一気に口に流し込む。

天帝とウーゴが一気に駆け寄るが間に合わない。

「っ！！！！！」

ウーゴは突如起こった出来事にパニックに陥りカティが憔悴のあまり毒を含んだと思って、慌てて医者を呼びに行こうとしたが、テロに無言で止められる。

落ち着いてみると、目の前のカティは倒れておらずただ眉間に皺を寄せて「うううう」と唸っている

それと同時にカティの身体から微かに香る『魔』の香り

カティは『魔薬』を飲んだのだった

深い愛で見守る（後書き）

長くなりました（苦笑）

段々と調子に乗ってきてキャラが動いてくれるようになってきました

…それと同時に最初の方を少し手直しが必要かしら？と考えている
今日この頃なのでした

よければ感想など聞かせて下さ〜いvvvv

魔薬

テロの腕の中のカティの眉間にぐううと皺が寄る
魔を体内に入れるなど普通の人間であれば即座に自我が保てなくな
る行為だった

自我を無くした人は意味なく流離^{うらい}い朽ち果てる

いくら天妃といえどカティは人間、テロの身体に緊張がはしる

「カティ？」

「……」

「身体に何か異常はないか？」

「……」

返事が無い事にテロの焦りが出てくる

「カティ。今から無理に吐き出させる…辛いが我慢してくれ…」

カティの顔を上向けると、口元を覆う両手を外す

そして口の中に指を入れようとした瞬間、カティの口から声が出た

「うううう…不味すぎる…これ…不味すぎる…。ありえない天才薬
師と言われた私とした事が…こんなに不味いものを作ってしまった
なんて…」

「カティ？」

「はっ！！テロっ！！『天帝の銘』は？」

カティの眉間の皺が無くなったと思ったら、すごい勢いでテロに向
かう。

テロがカティの前髪をあげるとそこに先程まで輝いていた『天帝の

銘』が消えていた

「消えている…」

「やったあああ！！！！やつぱり神の波動は魔で相殺出来ると思ってた私の考えは間違いじゃなかったんだわっ！！」

くううと歓喜して躍り上がるカティと、対照的にテロの機嫌は急降下していく

テロは躍り上がるカティを無言で抱え直すと額に手をかき弱す

「わっ！！ちよっちよっとな…何してんのっ！！！！」

カティにはわからないが、テロはカティの身体の中から微かにまだ波動が出ているのを感じていた

自分の考えが正しいか試すようにテロは翳した手に自分の波動を纏わす。

「あ…あつ…熱いつ」

カティがテロの手を退けようとするが、彼は許さない。

すると、消えたはずの『天帝の銘』がゆっくりと再び浮かび上がった

「なるほど…」

「熱いから離してっ！！何が「なるほど…」なの！！」

カティが手を退けるのを今度は止めなかった

テロの手が額から離れると、『天帝の銘』もすうっと消える

カティの『天帝の銘』は消えたわけではなく、彼女の体内に鎮められただけでテロの強い波動に包まれるとすぐに浮かび上がる。

テロは一先ず銘が消えたわけではない事に安心した………が、怒り

は収まらない

「『魔薬』を飲むなんて…何を考えていた？」

「あ…」

テロの腕の中のカティが目を伏せ気まずそうにしている

「下手すれば廃人になってたかもしれないんだぞ…」

「ちゃんと分量を計算したし、ならないわよ。あたしを誰だと思っ
てんの？天才薬師カティ様よっ！！」

「どうしてそんな事がわかる…」

「だって作った時にいろんな人で実験…あ…」

テロは彼女と天界で過ごした長い間に忘れていた。

カティが結婚で天界に上がる前に地上でつけられていた名を…

彼女は

『ミライナのマッドサイエンティスト』

と呼ばれていたのだった。

魔薬（後書き）

ミライナとはカティの村の名前です

天帝の波動

テロの機嫌は最高潮に悪く。今までに聞いた事のないような声をカティは聞く事になった

「…実験とは？」

「これを作った時、得体の知れない薬を神族に飲ますわけにはいかない！とか言われてムカついたんで…その時つい…」

「つい？」

「ちよつとしたサンプリングデータを作る為に…」

「為に？」

「……あう」

「カティ」

何とか話を終わらせようとカティは試みるが、テロに阻止されっぱなしだった

こうなると正直に言ってしまった方が、傷は浅いだろうと思って勢い良くカティは言った

「どの程度人で耐えられるかを自分で試してみましたっ！！！」

「っ！！！」

カティの性格から100%安全を確保出来ない人体実験は他人に出来ない！とテロはだいたい予想していた事とはいえ、10年以上前にそんな危険な事をしていた事実に愕然としてしまう。しかもその事は当事者だった分余計にショックは大きかった

「カティ…」

「あの時のデータは今でも頭の中に入ってるし、だから大丈夫！」

テロはぎゅっとカティを抱きしめ、首もとに頭を埋める

「やはり…連れて帰る」

「はあ！？ちよっ！」

テロが一分一秒離したくない思いにかられる相手などカティ以外に居ない

「ウっウーゴっ！！この人納得したんじゃないのっ！！！」

全てを茫然と見守っていたウーゴがはつと我に返る

「いや…先程までは、『天帝の銘』さえなんとかなれば…その…」

「やつ約束は…ま…守ってよお…陛…下…」

ぎゅっと抱いて離さないテロに、カティは思い切り反抗して手で押し退けようとす

「陛下などと…呼ぶな」

今までの碎けた感じから突然カティに陛下と呼ばれると、二人の間に高い壁が出来た様な気がして不安に駆られる

テロも本来の愛しいカティに戻ってくれるのは嬉しいが、それが自分の手によってではなく、地上に戻ったからだという事に対して地上にさえ嫉妬する

ドクンッ

テロは自分の中で波立つ物を感じた。

「いつそ全て破壊こわしてしまおうか」

誰に聞こえるでもなくテロは呟く

ドクンッ

波立つ物は止まる事なくテロを支配する。

——天界も地上も魔界も…全て破壊して二人だけの世界を新たに創る。

ドクンッ

天界に居た時から考えていた甘い誘惑が嫉妬によって再燃する。

ウーゴはテロの波動の抑制が外れていくのを感じた

「きゃっ!!何っ!?!」

「陛下っ!!!!」

テロとカティの周りの土がどんどん剥がされ天に向かう。

慌ててウーゴがテロの周りに結界を張るが簡単に弾かれる

「陛下っ!!」と何度もテロに声を掛けるが、内に籠ってしまった
テロの耳には届かない

「ちよっ…何これっ！」
「陛下の力ですっ…！」

ウーゴが地に手をつき必死に波動で押さえ込もうとするが、天帝の力の前に太刀打ち出来ない

「くそっ…！」

「ほんとに…これ陛下の仕業なの？」

「はい…このままでは地上が…」

カティは自分を抱き寄せるテロの顔を見て、自分を見るその瞳には何も映されていないように感じた

「陛下っ…！陛下っ…！！」

カティが何度呼んでもテロは反応を示さない

「もう！テロっ…！」

——このままでは地上が崩壊してしまう

恐怖に駆られたカティは両手でテロの顔を掴む。

「目え覚ませ…！馬鹿っ…！」

そっ…

思い切り

首に噛み付いた

天帝の波動（後書き）

…なかなか本筋に戻れない（ぐはっ）

明日はもう少し更新出来そうな感じですよ

活動報告にてイラスト展示中です！！

鎮火

まるで獲物を仕留める獣のようにテロの首から離れないカティ。

テロが首から感じる痛みに「つつつ」と呻くと同時に浮き上がっていた地表が元の位置に戻り、彼の何も映していたかった瞳に力が戻る

「カティ？」

「……」

「カティ…もう大丈夫だ…」

テロの言葉にもカティは口を離そうとしない。

「ふうーふうー」と荒い息をして、目をぎゅっと閉じ自分の首元に噛み付くカティにテロはゆっくりと頭を撫でながら「大丈夫」という言葉を繰り返す

テロも我を失ってしまったが、そのテロの力を初めて目にしたカティも極度の興奮状態に陥ってしまった。今も我を取り戻しきれない。

もしかしたら『魔薬』の副作用もあるかもしれないとテロは考えるが、取りあえず今カティを落ち着かせる事を優先した

「カティ？戻っておいで…」

「あ…うう」

ようやく落ち着いたのかカティがテロの首から顔を上げる。

その唇にはテロの赤い血がべつとりと付き、カティをまるで人外の者のように見せた。

「あ…テロ。もう大丈夫なの？」

「ああカティ。すまなかつた」

「陛下っ！！」

二人の雰囲気割って入るようにウーゴがテロの首に布を当てる

「あ…」

そのウーゴの行為にカティは唇に手を持っていき、そこに着いた紅い物に茫然となる

「あたし……」

「カティ。大丈夫だ。それより止めてくれてありがとう。我を失うなんて恥ずかしい限りだ……まだまだ私も修行が必要だな」

「陛下……カンデラを呼びます」

カンデラは水帝の力で、回復の波動を使う事が出来る

「必要ない」

大事にしてカティを怯えさせたくなかったのでウーゴの言葉をテロは退ける。

カティは慌てて袖の中をこそごと探り、袖口から何かを取り出した
一瞬テロは『魔薬』が出てくるのかぎよっとしたが、それは丸い容器の薬だったらしく、カティは蓋を開け、中の薬を自分が傷つけてしまったテロの首に塗る。

「天界の回復草を使ってるから、多分効くと思う」

「ありがとう」

自分がしてしまった事に顔を歪めるカティに笑って欲しくてテロは自分の思いとは違う言葉を口にする

「……カティ、地上の件は認める」

一瞬カティの顔が明るくなるが、テロの首を見るとやはりしゅんと頂垂れる

ただテロも波動の力を意図的に傷口に持っていき治療していたので既に出血は止まっているどころか傷口も回復しつつある

「怖い思いをさせてしまってすまなかった」

そういうとテロは一度ぎゅっとカティを抱きしめると自分が出した決断を覆さない内に彼女を離れた。そしてウーゴに向き直って言葉を発す

「波動の影響が他に及んでないか調べる為に天界に戻る。お前達も戻れ」

「御意」

ウーゴがテロに跪き、よく見ると遠くのドームの中でも五帝がみな跪いている

テロはカティを見て手を伸ばす

「ひとまずここで安心して暮らせる環境になるまで、天界に戻る事は出来ないか？」

「大丈夫よ。家だってある…し…あれ？」

「家が…ない」

先程まで古びた家があった場所は、家の跡形もなく更地と化していた

「え？」

気まずそうにウーゴが頭を抱える

「ウーゴ？」

「古い家でしたので…火柱に水柱。サイクロンに落雷では…ひとたまりもありませんでした」

「ええっ!？」

「申し訳ありませんでした」

「…らああああ!! 貴様らそこに直れえええっつ!!!!」

カティはまっすぐドームの方に向かっていき、ドームの中の四帝に鬼の形相を見せていたのだった。

もちろん四帝はそんなカティを見るのは初めてで、驚愕に震えていた

その後カティが一時天界に戻って地上に降りてきた時には結界バツチリ、現在のカティの畑が出来上がっていたのだった

鎮火（後書き）

ようやくっ！！ようやくっ！！次回から本筋に戻れます
短編の番外編を2作ほどUPしております

一時の休息

天帝が降りてきて30分が経過していた。

その間カティは何とか腕から逃れようと頑張ってみたが、暴れようが何をしようがテロの腕が緩む事は一向に無く、最終的にカティは農道で跪く皆さんに合掌で謝るしか出来なかった。

ようやくウーゴがテロとカティの側に寄ってきて言った一言にカティは喜びで抱きつきたい衝動を押さえるのが大変だった

「とりあえずお茶でもいかがですか？」

その言葉によろやく動く気になったのかテロはカティをお姫様抱っこにすると五帝が座していたテーブルに近づいていった。既にテーブルには席が用意されており、カティが自分の席に座ろうとするがテロは下ろす気は一切ないようで、自分が座った膝にカティを乗せた

69

「陛下…下ろして下さいませんか？」

「その口調を改めたら下ろしてもいい」

「……」

「……」

「……」

「…テロ…下ろして」

カティは自分の中での激しい葛藤の末、側に居ると生じる貞操の危機と言葉を直す事を天秤にかけ、後者の方が良いと判断した。テロはその口調に満足したのか満面の笑みでカティの唇にキスを落とすうとする

「こらこらこらっ!」

カティは慌ててテロの口元を押さえてそれを回避する

「何してるのよ…」

「夫婦のスキンシップだろう?」

「別居一年の夫婦にスキンシップなんて存在するわけないでしょうがっ! ……早く『元』妃の称号が欲しくて仕様がないのに…」

カティの最後の呟きは誰にいうでもなく、ほんとにぼそつと言っただけなのだがその言葉にテロが片眉を上げて反応する
その反応に慌てたのが五帝で、横から会話に入ってくる

「陛下。天妃様、お茶はいかがですか?」

ウーゴがそう言うと、カティは「天妃なんて呼ばないで」と怒っていたがテロはにこりとカティに微笑み

「そうだな。カティのハーブティが飲みたい」

と言った。

*

目の前にコポコポと暖かいハーブティを注ぎながら、カティはテロに視線を向けると「ふう」と溜息を吐きながら両手を前で組み、目を閉じる疲れたテロの姿があった

「…お疲れでいらっしゃいますね」

カティは「そんなに疲れているなら来なくてもいいのに」と続けようとしたが、テロの目の下の隈を見ると言葉が出なかった。良い香りのするカップを「どうぞ」とテロの前に置くと自分の席に座った。それと同時にテロが目を閉じたまま言葉を発する

「昨日は丸一日来れなかった」

地上に暮らしてすぐの頃は下手すると地上時間で1日に一回来る勢いだったので、そう言えば10日ぐらい来なかったなあとかティは言われて気付いた。

カティはテロに心配して貰って胸をジンと熱くしたが、その気持ちは深く沈めた

「もうそろそろ私も落ち着いてきたし、そんなに心配しなくても大丈夫だよ？」

「……？……心配はしているが、私がここに来るのはその為だけじゃない」

「え……違つの？」

そのカティの答えに心外だと言う顔をテロは向ける

「妻にただ会いたいと思うのはそんなに不思議か？」

「え……だってあたし妻ドロップアウトしたし……」

「させた覚えは無い」

二人の会話に焼きもちを焼いたのか、アデリーが会話に入ってくる

「そう言えば陛下、机の上の釣書はどうになりました？」

その言葉を聞いた途端にテロの機嫌は急降下した

「釣書？」

「今まで天界では天妃様の事もあって、陛下にそんな自分の事をアピールする子もいなかったんだけど、地上の件があってから陛下の執務室が釣書で溢れてるのよ」

そっぴいなからアデリーはけらけらと笑った。

——釣書。という事は陛下は次の妃をとるのを了承したのかもしれない

ズキンツと胸に痛みが走るが、無理に抑えてにこりとテロに微笑んだ
「もてますね〜」など軽い口調でないと机に突っ伏してしまうところだった

一時の休息（後書き）

現在です。睡魔に究極に襲われてちょっと文章・誤字脱字自信ないです

間違ってたら知らせて下さい

閑話 炎帝アデライド 100億分の1の確率

どんどん下がる一方のテロの機嫌にアデリー以外の帝は彼女に対してそれぞれ抗議の視線を送るが、そんな事では彼女は動じない。カティが天界で過ごした間、一番彼女を見てきたアデリーはどれほど彼女が悩み苦しんだかを知っていた。自身の立場から言葉には出来なくても天妃など辞めてしまえばいいと思っている。

カティが地上に降りる半年前、二人で散歩していた時呟いた言葉が今でもアデリーの耳から離れない。記憶がカティが天界に居た頃に遡る

「人と神族だと子供はほぼ望めないんだって…」

「カティ…」

「今更100億分の1の確率とか言われちゃった」

カティが悩み苦しんだのは天帝ですらどうする事も出来ない自然の摂理。

どんなに侍女や貴族の姫に罵られても気にさえしなかったカティの絶望を含んだ言葉がアデリーの心に突き刺さる。淡々と空を見上げて語るその顔は泣くことさえ諦めた顔で、見ている方が辛くてアデリーは顔を反らしてしまった。そんなアデリーを余所にカティの呟きは続く

「…何であたしは人なのかな？」

「……」

アデリーは掛ける言葉が出てこなかった。神族である自分の言葉はカティの心には届かない気がした。

「くやしいなあ……」

そう言つてカティが一筋だけ流した涙。

それからのカティはまるで天界とのつながりを遮断するかの様に部屋に閉じこもってしまい、テロも五帝も遠ざけてただ苦しむ日々。

神族でない自分が天妃としての資格などないと思つていたカティ。妻としての役目も果たせないと知ってしまったカティ。

他の帝は愕然としていたけれど、アデリーは地上に戻つたのは喜ばしい事だと喜んだ。でもそれを知らせた長老達は、カティの悩みも苦勞も何も知らずに暴言を吐き続けて五帝の怒りを受けた。

アデリーは早くカティを苦しみから解放してあげたいのに……自分達神族が側にいると苦しみが続く事もわかつているのに……地上に通う事が止められない。

手に入れたいわげじゃない、ただ側にいたいだけの存在。

天界に戻るとすぐにカティの気配が恋しくなる。アデリーだけじゃない五帝全員がカティに狂っているのかもしれない。

「別の妃を見つければいいのに、でもカティ以外の妃なんて認めない」

「陛下が地上に来なければいいのに、でもカティを天界に連れ戻せるのは陛下だけ」

ジレンマの矛先にテロがいて、アデリーは今日もテロに八つ当たりをする

「アデリー？」

考え込んでいたアデリーにカティが声をかけ、彼女ははっと意識を現実に戻した

「…話しかけても何も言わないんだもん。大丈夫？」

アデリーに微笑みかけるカティの表情は穏やかで、地上に戻った事が改めてカティによかったのだと実感した。これがずっと続くといいのにと願わずにいられない。

願っているが現実にはこの状態をずっと続けられるとは思っていない。たった一年でテロが限界を迎えつつある事も五帝は肌で感じている。他に目を向けてくれるように釣書を送っても目もくれず、五帝以上にテロはカティへの執着を見せる。カティに天界でのような何もかも諦めた表情を二度とさせたくないから、答えを模索しても迷い込むばかりで何の解決も出来ない。

「…どうしてあたしは神族なのかしら？」

アデリーが口の中で呟いた言葉はカティの耳に届く事はなかった

暴走

アデリーに視線を向けているカティの額にズキンツと痛みが走る

「…っ」

「どうした？」

いち早くその様子を気がついたテロがカティの側に寄ろうとして、鼻腔内に広がる慣れた甘い香りに一瞬動きが止まる。それはカティの天妃の波動に違いなく、カティを見ると額に浮かび出た『天帝の銘』がより色濃く定着しようとしていた。

「いつから…こうなってる」

今まではテロが自分の波動と共鳴させなければ浮かび上がらなかったはずの『天帝の銘』。今テロは自分の波動をきちんと体内に納めているのでカティの銘と共鳴するはずが無い

「…うう」

「薬の効果が薄れ始めたか…ウーゴ。テーブルの周りの結界を強めよ。五帝は天界に戻り地上の安定に努めよ」

「……？」「……」

「カティの波動を抑える為に私の力を解放する」

「……ぎよ…御意」「……」

テロの言葉に五帝はすぐに行動する。

それぞれが側にいた従者を引き連れて皆大きな歪みの玉に身を投じる。ウーゴもテーブルの結界を強めた後歪みの玉に飛び込んだ

歪みの玉が消えるのを確認したテロは自身の中の波動をゆっくり解

放していく。

腕の中にカティを抱えると何かを口の中で詠唱し、額に口づけた。するとカティの銘は徐々に色を薄めて落ち着いていく、それと同時にカティも気を失った

使う者が使えば天帝と同等の力を持つ『天帝の銘』は本来、人の器では受け止められる物ではなかった。色濃くなるのは銘の波動が暴走するぎりぎりの状態を示していた。

「…無理に抑え込んでいた反動か」

テロが側にいなければカティの命にかかわる状態。

しかしカティを今天界に戻すと地上で取り戻した精神バランスはきつと前以上に悪い状態になるに違いない。だからといって地上に影響を与えかねないテロが常にカティの側にいるわけにもいかない。暴走状態の銘に対しテロは舌打ちをする

神族ではないカティに銘を授けた代償。

「くっ…」

遙か昔の幼き自分の面影と今のカティが重なる。強大すぎる波動をその身に宿し、中からその身を焼かれる感覚。

——あれをカティに経験させる？

テロの背中に汗が流れ出る。

—— そんな事は…させられない！

『魔薬』、テロの脳裏にその言葉が過る。

テロは自然とプラチナブロンドの前髪に隠れた左目を手で覆う。右目は歴代の王が持つ金の瞳であるのに対し、そこには魔の漆黒の瞳があった。

テロは幼少期に自身の強大な波動を抑える為に魔草をずっと食していた…その代償に瞳がどんどん金の色を失い黒く染まっていった。全てを魔に染められずに済んだのは、カティが魔草から偶然『魔薬』を作り出してくれたからだだった。

しかし神族にとって代償無く波動を抑えられる薬は世に混乱をもたらしかねない物だった。故にテロはすべて処分した…はずだった。

「もう一度…頼るしかないのか…」

『魔薬』の調査は魔を扱う為に神族では行う事が出来ない、だからといって他の人間にこの薬の事を知らせる事も出来ず、つまりカティ本人に調査させるしかない現実。…テロはその事を告げると喜ぶカティの姿が目に見えなくて、大きく溜息を吐いた

*

目覚めたカティにテロが『魔薬』の件を伝えると、テロの想像通り喜び踊りだした

「『魔草』萌ええ〜」や「調合高まるう〜」などの意味のわからない言葉を言うカティにテロは本日一番大きな溜息を吐いた。

「私が天界から波動を抑えられる期間は20日だ。その間に『魔薬』の調合を完成させてくれ」
「らじゃ！」

偶然出来た薬を作る事は新薬を作るのと同様で長く時間のかかる物であり、20日で調合するなど本来無茶な事だが、カティの顔は爛々と輝いていた。

暴走（後書き）

ちよつとずつお話が進行していきます

カティはやっぱり薬バカなので…今後どんだけはじけてくれるのか

…（笑）

逢瀬の時間

目覚めたカティはテロに抱えられている状態で、カティは『魔薬』の許可を貰ったので早く作業に入りたいのだがテロが離す気配がない

「テロ…」

「何だ？」

「もう大丈夫だし、離して欲しいんだけど」

カティがぎゅぐゅとテロの肩を押しても彼の力は一向に緩まない

「…やっと二人きりになれた」

「え？」

カティは痛みで意識が散漫になっていた事と、その後気を失ったため、五帝を含む周りの従者達一同が綺麗さっぱり居なくなってる事に初めて気がついた。

『二人きり』カティにとってこれほど恐ろしい事は無い

「あ…あれ？五帝は？いつぱい居た人達は??」

テロはそれには答えずに「フツ」と口の端を上げるだけだった。そして、もう一度ぎゅぐゅとカティを抱きしめると、カティを横抱きにし、すたすたと屋敷の方へ歩き始める。その行く先に見当を付けたカティがばたばたと暴れる。

「ええ!!ちよっ!!テっテロっ!!?何する気っ!!!!」

「『何』をする気だ」

テロに抑揚を変えて同じ言葉を言い返されて、「上手いな」なんて一瞬思ってしまったカティだったが、再び危機的状況に陥っている事に気付いた

「む…無理っ！！」

「…私も限界だ。前に二人きりになったのはいつだったか覚えてるか？」

「ええ？………？」

カティは必死に記憶を辿るが、いくら過去を思い出してもテロが降りてきている時は必ず五帝が記憶の隅っこに陣取っている。

「…んと？」

「天界時間で25日、地上時間で8ヶ月と3日だ。しかも肌を合わせたのは地上に降りてから一度もない。それをこの状況でまだ我慢しろというのか？」

「えっえーと…だったってあたし天妃辞め…お休み中だし…」

「私が許可したのは地上への里帰りだけで、それ以外の事を許可した覚えはない」

「でっでも、まさかずっと禁欲生活してたわけじゃ…」

冷たいテロからの視線を向けられるが、地上に居る事は自分の我侭に過ぎないのだから、テロが欲求を満たす事ぐらいは思う存分どうぞと思っ。

「何を考えているのか知らないが、カティ以外抱く気にもならない」

「…はい？だつて…あのテロが？」

カティは「朝の光を何度見たか…」と天界での生活を思い出して、テロが禁欲生活など有り得ないと首を振った。

「そ…それは、身体に悪いよ…」

「あれだけの性欲を持て余すのは…」と医師の様に呟きながら首を振るカティ。それを見てどす黒い物を纏っていくテロ

「ほう。ならこの身体でしっかり癒してもらおう」

「ええ!! なっ何で!?!」

「学者肌は捨てて、頭で考えず身体についてこい」

「いつ意味がわから〜ん!!!」

ばたんと屋敷の入口が閉じられる。

テロがそこから出てきたのは日が落ち、また昇り始めた頃だった。

逢瀬の時間（後書き）

…何だか最近暗い感じが続いたので、ちょこっとテロを幸せにして上げました（笑）また暫く会えない時間があるので補給補給！

閑話 伽の余韻の中で…

長い伽の時間が終わった後、意識の無いカティを抱いてテロは湯に浸かっていた。テロが身体を隅々まで綺麗に洗い流しているとカティの意識が覚醒^{おめ}め始め、やがて黒く大きな瞳がぱつちりと見開かれる。

「…テロ？」

「私以外の者だったら…その者の存在など無かった事にしてくれる」

「…冗談でも怖いから止めて」

「……」

冗談と取られたテロは少し眉間に皺を寄せるものの、今はカティを抱いた後の至福の時間なので気にしない事にして湯船の中のカティを引き寄せる

「カティ。薬を完成出来そうか？」

「…何で20日なの？」

「私の波動で天界からカティの波動を抑える事の出来る限界が20日だ。天界から地上へ波動を使うとなると他への影響を考慮しないわけにはいかないからな…」

「そっか…」

「それもこここの私の結界内での話だ。これから外に出ると私の波動は送れない。その場合…地上がカティの波動の影響を許容出来る時間は24時間だ」

「24時間…」

詳しいタイムリミットを言われ、もともと負けん気の強さが出てカティの中で更に気合いが入る。

「20日経って薬が出来ない場合は有無を言わずに天界に連れ帰るからな」

有無を言わせないテロの口調にカティは少し拗ねた。

「でもさ…そもそもあたしの銘を消せば早い話なんじゃないの？」

カティの呟きにテロは一度大きく溜息を吐いてから話始める

「…カティ、一度しか言わないからよく聞くんた。銘を消すというのは、カティの身体の中の波動を無くすという事だ」

「う…うん」

「お前が天界で過ごした時間は天界時間で10年、地上時間では約100年だ。そもそも人の寿命はとうに尽きているはずのカティが生きているのは何故だと思う？」

畳み掛けるように話すテロにカティは何も答えられない

「『天帝の銘』の波動を失った瞬間に、カティの身体は急速な老化が進み、その速度に身体がついていかず…」

声を詰めるテロ、水音だけがその場を支配する

「…あ…あれ？…あたし…死んじゃうの…？」

カティの呟きに更にテロの腕に力が入る。カティにとって『天帝の銘』は自分では扱う事の出来ないただの波動の元だと思っていた為、自分の命の源になってるといふ事に動揺を隠せない。

「消さないから死なない。ただ…安易に銘を消すと言うのは…もう止めてくれ…」

「…テロ」

「これは天帝のみしか知らない事だが、銘の波動は一方的に天帝の波動とリンクして…私の寿命が今のカティの寿命だ。歴代の天帝はそんな同体さが嫌で『天帝の銘』を正妃に与えなかった者もいる。ただ…選択肢は無かったんだ」

「あたしが…人だから？」

「…今更こんな説明を聞かせて…すまない」

カティが身体を反転させてとテロの顔を見ると彼の辛そうな顔が見えた。カティはそつとテロ類に手を当ててから首を横に振る。銘をこの身体に宿した事は後悔していない。今更取り出せないと言われる事も事情を聞いたら理解出来る。

「『天帝の銘』を持つ者と、天妃って分ける事出来るの？」

「…さあ？そんな事必要がなかったからな…考えた事もない」

「今から考えたりなんか…」

「必要ない」

「……ぐうううう」

カティにとつてはつきり解決した問題もあれば、難問も増えた。寿命は神族でもカティの身体が人から変わったわけではない。天妃を辞める事も出来ない。

嫌だけど…凄く嫌だけど…天妃を辞められない以上、テロが側室を持つ必要が出てくる。その為にはあたしが地上で過ごす時間は絶対に必要で確保しなくちゃいけない。とにかく『魔薬』を作らなければ！

カティは新たな展開と使命に燃えて、『魔薬』製作を心新たに誓ったのだった。

カティは一応聞いてみる

「側室なんて…」

「いかがですか？」と続けようとして続けられなかった。テロの目が見開かれたかと思うと細められ、眉間の皺が深くなった。返事を聞かなくてもその表情で答えがわかる。

「…ですよね」

「私の伽の心配をするなど…随分まだ余裕だな。その要望には答えてやらなくてはな」

「えっええ！？ちっ違っ！！」

カティは返事を言い切る前に寢室に再び戻されたのだった。

閑話 伽の余韻の中で…（後書き）

やっとテロが銘を消せない本当の理由を話せました。

というわけでどんどんカティが追いつめられていきますが、二人は
ハピエンになる予定ですので、ご安心をっ！！

如才ない男

カティが行動を起こす事が出来たのはテロが天界に戻った日の昼すぎだった。

ベットの中でまだふらつく身体を何とか起こし行動する

「20日しかないのに…寝てる暇なんてないってのに…あんの…絶倫男め…」

カティは腰を支えながら、よろよろと洗面場に行き冷たい水で顔を洗う。少しすすきりした顔で大きく息を吐くと目の前の鏡に向かって宣言する

「とにかく出来る事を精一杯するっ!!」

『ぐうう』

カティはテロに寝室から出してもらえず、昨日の夜から何も食べてなかった。

「お腹空いた…補給は大事!」

棚と冷蔵庫にある食材を頭に浮かべつつ、出来る料理を思い浮かべる。もともと研究者なカティは研究を始めると、食事も忘れて没頭してしまう癖を自分でも自覚しており、食事は出来る時に大量に補給していたという過去を思い出して、くっくと笑う。

過去にしていた事のように久しぶりのやりがいのある研究に、心底から喜びが沸き上がる。うきうきしながら台所に入るとそこに並ぶ料理の数々に目が点になる。

「…これ、…テロ？」

暫く料理を前に茫然としていたが、カティは空腹にこの香りは毒だ…と「ありがとう。頂きます！」というと一気に食べ始めた。

「…美味すぎ」

カティは「どうやったたらうちの食材でこんな豪華な料理が出来るんだ？」と疑問に思いつつ、全皿綺麗に平らげていく。みるみる内に減っていく料理。丁度最後の皿を食べ終えた所でカティのお腹が満たされた。

「この量。…何て如才無い男なんだ」

飲み物を飲もうと冷蔵庫を開けると、そこには夜食が詰まっていた。それを見てカティは思わず

「…何て如才無い男」

ともう一度繰り返してしまふ。今から研究室にこもるという事はきつと夕食は食べない。でも夜遅くにはお腹がすくと思うので、そんな時にちよつと摘んで食べれる物：天帝ってそんな事も見透かしてしまふのか？とさすがにビビる。しかもいつもただの水を冷やしているところにはきちんとアイスハーブティーがあった。

「素晴らしすぎる…って嫁いる？…これ」

感動を通り越して複雑な思いを抱きつつ、ハーブティーを持って研究室、通称ラボと呼んでる離れに向かう。外壁に無数の薬草が吊らられているそこはカティにとって天国だった。扉を開けて中に入る。

部屋の中は一見乱雑にすべてが置かれている様に見えるがカティナりの法則によつてたくさんの器具、薬草、書物や紙が置かれていた。「さあ！今日もはりきつて未知との遭遇！しますかっ！！っあ…その前に…」

カティは目当ての種を棚から取ると、畑に向かう。手にしたアルメアの種を昨日作った畝に蒔いていく。

「はやあーく大きくなってねっ！と」

他の花達には水をやるうとしてホースを手に持ってきていたけど、どうみても土が濡れていた。

「…何て如才無い男」

テロが天界で身をブルッと震わしていた事はもちろんカティは知らない

如才ない男（後書き）

テロのママさが…（笑）

もう一途にカティを好き過ぎて哀れです（苦笑）

検体

「さて…何から手をつけましょうかね…」

ラボに戻ったカティは途方に暮れていた。残っていた『魔薬』は自身で全部飲んでしまったし、研究メモの類いも実家に全て置いてたので五帝によって消失されてしまった。よくよく考えると『魔薬』に関してカティの手元には何も資料が無い事に今更気付いたのだった。

「うう…こんな事になるなら『魔薬』少し置いとけばよかった…」

10年以上も前の調査を自身の記憶だけを頼りに行わなければいけない現実に思わず逃避をしそうになる。しかもこうしてる間にも20日というタイムリミットはどんどん減っていつている。

「あとは…検体しかないけど…」

『検体』それは検査の材料をさす言葉で血液・髄液・尿や組織の一部等を纏めて言うのだが…もちろん今回の場合は尿や組織の一部は関係なく、髄液など一人では採れないので、自ずと血液になる、しかし…カティは大の注射嫌いだった。

「やるしか…ないんだよねえ…」

青い顔をしながら袖を捲り上げカティは覚悟を決めて注射器を手取るが、まだ針も刺さっていないのに「うう」と呻いている。「ふう・ふう・ふう」と呼吸を整えようと努力するが、心臓は異常な早さで脈を打つ。

「よしっ！いきますー！！」

というとカティは自身に針を突き立てた。「これは『ちくっ』じゃない」と泣きそうになりながらカティは思う。ある程度採取出来た所で針を抜いたが、注射筒に溜まる自分の血液に目眩を起こしそうになった。

*

試験管の中には試験薬と自分の血液が混ざった物が入っており、カティはそれを振り混ぜながらその反応を見ていた。カティの血で赤く色付いていた水が黒く染まる。今まで検査した10本の試験管のうち反応を示したのは1本だけだった。

「『魔草』の中でもジゾリアス系の物つと」

カティは今の検査の行程と結果を手にしている紙に書き留める。それが終わると「ここまでの分類は早いんだけどねえ」と呟きながら近くにあった『魔草』と表紙に書かれた本を取り、パラパラとページを捲っていく。

「…ジゾリアス系の魔草…：5600種…」

予想より随分多い数にカティは思わず本を投げ出してしまふ。生息地で絞られるとしても半数は地上に存在する2800種。なおかつこの付近に生息している物…300種

「魔草だけでこれって…300種なんて発見出来るかあ〜！」

カティは机に突っ伏すと暫くそのままだったが、「それでも…やるしかない…」と呟いて『がばっ』と立ち上がり近くにあった草の採取道具を手に取っていく。掛けてあるこの付近の地図を見て一番近い魔の森を確認した。

「とりあえず50種目標で！」

そういうとカティはラボを後にした

魔の森

カティが地図で確認すると、一番近い魔の森で歩いて約1時間ぐらいの場所だった。

家の敷地にそって張られた透明な結界を出るとカティは自分を纏う空気が変わったのを感じた。

「さてと…行きますか」

カティは誰に言うでもなく呟くと、背の荷物を持ち直して歩き始めた。のどかな田舎道は歩いていても悩み事がそんなに深刻にならずにすんだ。そんな悩みを考えるより時期的に野草が成長する今の時期はカティにとって天国のような時期だった

「メグラシアの花〜！」

「酔い菜の草ももう顔を出してるっ」

「この夜霧蔓はまだ時期が早いなあ…」

など一人で叫んではごそごそとその草を採集する姿に村の人もなかなか声を掛けずらく、もし声を掛けても採集に夢中のカティにその声が届かない事も多かった。

そんな寄り道を繰り返してしまい、結局魔の森についたのは出発から2時間以上経ってからだだった。

*

どんよりと日の光が遮られた森は、鬱蒼としていて『魔の森』という名に相応しい感じを漂わせていた。その光景に怯むどころか目を爛々と輝かせるカティ。少し気になるのは魔の森に近づくに連れて

頭の奥で『ツキンツ』と覚えのある痛みが走ったが、その程度の痛みではカティの研究欲を失わせる事は出来なかった。

「ふふふっ待ってなさいよジゾリアスちゃん」

明らかに変わる草の感じではつきりとここからが『魔の森』だとわかるそこに、何の躊躇もなく踏み込もうとした瞬間。パキンと何かが壊れた。

「ん？」

もう一步踏み込むと更にパキン・パキンと壊れる音が耳に響く。足下を見ると鬱蒼と茂っていた足下の草が休息に枯れていく。

「…え？うわっ！！」

カティは慌てて森を出て元の位置に戻ると、自身が踏み込んだ場所を見て茫然となる。そこは彼女が居た場所を中心に1メートル四方が死の世界と化していた。それどころかカティが立っている入口付近の植物もどんどん頭を項垂れ元気を無くしていく。

「な…何で…」

理由はわからないが自分が何らかの影響を与えてる事はわかったので、とりあえず後ずさって森から距離を取る。カティが離れると入口付近の植物はゆっくりと元の姿になった。結婚前に地上にいた頃にはならなかった現象に思い当たるのは一つしかなく

「これ『天帝の銘』のせい？」

『魔』の対極にある『神』。カティは人とはいえ神の波動を身体に宿している、つまり魔の世界には踏み込めない事がわかった。

「…どうすんのよ？こんなの…絶対『魔薬』なんて作れないじゃん…」

カティは目の前にある『魔の森』がとても遠い世界に感じた。ただただその場で森を見つめているカティに突然どこからか声がかけられたかと思うと、首を拘束されて息が詰まった。

『…お前が魔の領域を汚した者か？』

「ぐっ…だ、だ…れっ!？」

『…ん？お前：人？なのに…お前の身体から神族の波動が…』

カティは一瞬首を締める力が緩んだ瞬間に、拘束した者に対して肘打ちを食らわせる

『ぐう…』

「…ほっ…ほっ…ほっ」

カティは逃げなくてはと思うが、魔に対峙して頭痛が徐々に大きくなってきて身体が動かない。苦しみの中、視線だけを相手に向ける。黒い肌に黒い瞳、漆黒の髪は短くそこから見える耳は尖っていた。

「はあ…はあ…あなた…魔族？」

『お前は…何だ？訳がわからない』

また拘束しようと魔族の手がカティに伸ばされるが、その瞬間また目の前の魔族とは別のところから声が聞こえた。一気にカティの頭

痛が爆発する

『スト~~~~~ッブ!!!!』

その瞬間、カティは意識を失っていた

魔族

『ストゥップ』と声を張り上げた男は、カティを捕らえている男と似た容姿をしており一目で魔族とわかる。だが身に纏う魔はその男とは桁違いに濃かった

魔の森から声の主が出ると、その男は腕の中で気絶するカティを放り出し、膝について敬意の意を声の主を表す

『ネストリ様：わざわざこのような所に…』

『ユホ！その御方を乱暴に扱うなっ！！』

ネストリと呼ばれた声の主は慌てて自分の中の魔を消し去る。そして口の中で何か詠唱すると着けていた外套を脱ぎ空中に浮かべ、放り出されたカティを慎重に抱き上げてその上に寝かせた。

『ネストリ様？外套が汚れてしまいました。たかが人間にそのような

…』

『この御方はただの人間ひとじゃないんだぞ！』

『？』

『ああ…ユホの『魔』に当てられてしまったんですね…』とぶつぶつ呟きながら、自分の持ってきた物で治療し始めるネストリをユホは唖然と見ていた。どちらかかという自分と同じ様に人が嫌いなはずのネストリが人間を助けようと必死になっているのが全くもって腑に落ちない。『ただの人ではないとはどういう事か？』その答えを求めようとユホはネストリに話しかける。

『どうしてそのような…』

『ユホ、黙って僕が持ってきた外套と面を着けて離れて座ってる！』

命令されてしまえばどのように納得出来ない事でも、ネストリの方が立場も何もかも全てが上位な為、その言葉に従うしかない。面と外套を身に纏い少し離れた所で膝をついて、ネストリとカティを見ていた

しばらくすると頭痛が和らいだカティの目が薄らと開く。

「う……う……」

「気がつかれましたか？」

「……誰！つうわう！」

カティは目の前の魔族を見て、先程突然現れた魔族に首を絞められた事を思い出し、飛び退いたら外套から落ちそうになった。

「あぶないっ！」

とっさにネストリにカティは支えられた、それによってより間近にネストリの顔を見る事になり、よく見ると先程の魔族とは違う顔だと気付いた。肌の色や耳の形、髪の色などは変わらないが明らかに整った顔立ちだった。

「重ね重ね、す……すみません。」

「天妃様」

突然地上では使っていない敬称で呼ばれ、顔を顰めてしまう

「……？……誰？」

外套にきちんとカティを座らせて安定させると、ネストリは少し離れて膝をつき敬意を払う挨拶をした。ユホが息を呑む、だが面と少

し離れているので二人は気付かない

『初めてお目にかかります。ヴェイニの弟でネストリと申します』

「……………」

『……………』

「えええ……………ヴェイニの弟!？」

カティの頭の中に昔『魔草』を探して魔の森に入った際に知り合った魔族の事が思い出される。

『はい。兄上より度々天妃様のお話しは伺っております』

「…あ、それは…ど…どうも…」

カティはどう思い出してもパシリの様にしか扱っていなかったヴェイニの弟を前にして汗が吹き出してくるのを感じる

「?え…ヴェイニ…さんは…元気ですか？」

『はい。つい先日魔帝への即位の儀が終わった所ですので…』

「まっ魔帝!？ヴェ…ヴェイニって皇族だったの?」

カティは淡々と語るネストリの言葉をおもいつきり遮ってしまった。天が世界を形成するのに対し、魔は生命体を形成する、魔帝と言えばその『魔』の最高権力者で、天帝と同等の力を持つ立場だった。

『おや?ご存知ありませんでしたか?』

首を傾げるネストリにカティは首をぶんぶん縦に振る。

『兄上は天妃様がここにおられる事をすぐに察せられて、ここに来ようとしたのですが、何分多忙でして…泣く泣く代わりに僕を、と

仰せつかりました』

ネストリは兄が天妃の元に駆けつけようとして、周りの側近達に羽交い締めを押さえつけられていた姿を思い出す、『じゃあ私が代わりに行って差し上げますv』と言った時の兄の怒りの表情が忘れられず、口元が自然と緩むのを止められない。そのネストリとは対照的にカティの顔色はネストリの話を聞けば聞くほど蒼くなる。カティは昔の自分の思い出し、どう考えてもヴェイニと『懐かしいね』などの和やかな雰囲気を作れるとは思えず、『し…仕返し?』と怯えてしまうのだった。

「あわわ…わ、私…こ、殺されるんでしょうか?」

『どうしてそのような馬鹿げた事を…兄上は貴方をあんなに御慕いしてるのに…』

「お…御慕いい!?!」

カティは昔の自分の行動が『抹殺物』であれば理解出来るが、どうすれば『御慕い』になるのか見当もつかなかった。

『ええ。天妃様が天界から地上へ戻られると聞いて、それまで全くやる気のなかった『魔帝』になると言い出したんですから』

「…それは別にあたし関係ないんじゃない?」

『いいえ。きつと天妃に見合う立場に兄上はなりたかったんだと思いますよ』

「……………」

寝耳に水の話に、ただただカティは啞然とするばかりだった。

魔族（後書き）

お気に入り登録が500件をこえました！
ほんとに感謝カンゲキですv vこれからもよろしくお願いします！！
感謝を込めていつもより少し多いです。

ライバル
魔帝登場！

しかしカティは全くそんな事を自覚しておりません。

∴ カティがヴェイニに対してどんなだったかは∴また番外編でも
（笑）

新作（異世界トリップ物）も投下しました。そちらも良ければぜひ

∴

怒帝 ヌホ

立て続けに予想外の事ばかりが起こって固まってしまったカティをここぞとばかりにじつくり観察するネストリ。そこへ少し離れた場所から咳払いが聞こえる。ネストリがそちらに視線を向けると先程から片膝をついたまますつと同じ姿勢でいるユホの姿があった

「ん？ああ、ユホすまない。忘れてました」

「いえ…、そろそろ事情をお伺いしてもよろしいでしょうか？」

「そうですね。貴方にも少し協力して頂きたいですし…天妃様？」

ネストリの視線がカティに戻されて問いかける。カティはハツと意識を戻したが、天妃様という呼びかけにすぐ素直に返事が出来ない。

「……」

「？」

「あの…その『天妃様』って止めて貰えると嬉しいんですけど、地上にいる間は何も出来ない普通の人ですし、カティで良いですから…」

普通の人間は魔の森を破壊なんてしないだろ…とユホは心の中で思いつつ、改めて『天妃』と呼ばれた人を観察した。それに気付いたネストリに凍り付くような視線を向けられ、ユホは慌てて俯く。

「…わかりました。ではカティ様でよろしいですか？先程カティ様に失礼をしたこの魔の者はユホと申します。ユホこちらに来て挨拶を許す」

許可が下りた事によってユホは膝をついた場所からネストリとカテ

イの側に歩み寄り、そこでまた膝について敬意を示す。

『ユホと申します。この地上との境の魔を統治しております』

「あ…それで…」

何故、自分が彼の攻撃の対象となったのかわからなかったカティは、今のユホの言葉で納得する。カティはネストリの外套から降りると膝をついたユホの高さになるように屈んだ。そしてカティから出た言葉にユホは驚かされる

「ほんとにすみませんでした。まさか自分の力で魔の森に危害が加わるとは思ってもみなかったので…」

そう言うとカティはユホに頭を下げた。カティから出た言葉と行動にユホは驚かされる。今までユホが出会った皇族・貴族達は自分に非が有る無しは関係なく、謝罪をしている姿などを見た事が無く、この場合もユホは先程の自分の行動を咎められる事はあっても、まさか謝られるなど想定していなかった。

『ユホ…カティ様の頭をいつまで下げさせておくつもりだ』

ネストリに言われるまでユホは目の前のカティに何も言う事が出来なかった。

『こちらこそ…申し訳ありませんでした』

その言葉に顔を上げたカティがにっこりと笑顔をユホに向け、手を差し出してくる。明らかに握手を求めるその手にユホの額から汗が流れ出る。

「じゃあ仲直り！」

『お言葉だけで…あの…その…お手を握るなどは…』

「大丈夫だよ！ちゃんと畑仕事の後も手洗ってるし、今日は特に薬品扱ったから綺麗に洗ってるよ？」

全くユホの言葉を理解しないカティに、彼はオロオロとするしか出来なかった。そんなオロオロとするユホを見てネストリが吹き出す。

『ネストリ様…』

『くくつ…怒帝のユホが…くくつ。すみませんカティ様、ユホが困っている様ですよ？』

「何で？」

『さすがに天妃様のお手を握る勇氣を持つ物はなかなか居ません』

「…天妃とかで断られるとムカつく。…首締めたんだから…握手ぐらい…」

『ぐつ…』

その言葉にユホは蒼くなり、ネストリはもう我慢出来ないのかお腹を抱えて爆笑し、カティはそんな二人を見て眉間の皺を深くしていくのだった

怒帝 ヌホ（後書き）

怒帝ユホです。魔族は生物の感情を扱う者達なので、、、、
ネストリは皇族なので特に、帝というのはありません。

魔具

少し離れた所で笑い悶えるネストリにカティは冷たい一瞥を向けると、ユホを振り返り今浮かんできた疑問をそのままぶつける

「…ねえ、ところで何で服装が変わってるの？」

「え？…あつこれはネストリ様から着ると…」

「…ネストリ様から？」

「ネストリとお呼び下さい」

いつのまにかネストリの笑いは収まって、カティの側に立っていた。

「ユホが身につけている物は我が魔族が開発した魔具でございます」
「魔具？」

カティは神族に比べて波動の力が弱い魔族は、優れた具を作る事でそれを補い、魔族と神族のバランスが取られていると天界での史書で読んだ事を思い出した。しかしカティは実物の魔具を目にした事ではなく、研究者としての血が騒ぎ、目が輝きだす。

「これが…魔具？」

カティの基本分野は薬学であったが、その知識はそれだけに留まらず、それ故興味の対象も無限大に存在する。ユホの姿は装飾のない透明な面と分厚い外套によってまるで妖しい従者のようではあったが、特に何かの力を纏っている様には見えなかった

「左様でございます。カティ様が寝ていた外套も然りです」

カティは浮いている外套を手にとると、ネストリにその輝く目を向けた。

「これはどういった物なの？」

「これらは波動を抑える魔具であります」

「波動を…これで抑えられるの？」

「神族の波動を全て遮る事は無理だと思いますが…我ら魔の波動はそれほど強くはありませんのでこれで十分なのです。生命体を形成する我らの波動は微弱でも人に多大に影響を与えますから、人との接触の際には掟で魔具の着用を定めています」

カティはネストリの解りやすい説明に舌を巻きながら、ユホを見て違和感を口にする

「ってユホさん…着てなかったよね？」

「申し訳ありません。まさか魔の森を破壊して歩く者が人だとは思わなかったものですから…」

「あたしはエイリアンかつ!!」

カティが冗談のつもりで言った言葉にユホの顔色が蒼くなる

「神族の波動を纏う新種の人間かと…」

「新種かよっ!!」

「……………」

流れる変な空気にこれはスルーするべきだと判断したカティは、横で再び笑いを堪えているネストリに浮かんだもう一つの疑問を投げかけた

「今あたしすっごい頭痛がしたんだけど…、それも魔の波動のせい

？」

『そうですね。カティ様の体内の不安定な波動がユホの魔の波動と共鳴したからだと思います』

「共鳴？」

『はい。微かにカティ様の体内から魔を感じられますので、本来相容れないはずの二つの波動がそれを媒体に融合された結果なのではないかと？』

「そっか。ああ！波動で思い出した！この外套着たらあたし『魔の森』に入れる？」

カティはすっかり『魔薬』の事を忘れていた事にびっくりしつつ、新たなアイテムによって希望が見えた事に喜びが浮上する。しかしそれもネストリの返事を聞いてまた叩き落とされた。

「いえ…この外套ではそこまでの力はありません」

見るからにシユンとなったカティにネストリは苦笑し、言葉を続ける

「ですが、こちらの魔具を使って頂ければ」

そう言つてネストリは瑠璃色の石の付いた指輪をカティに渡す。

『この指輪は契約者の魔族と何処にいても交信する事が出来ますので、『魔の森』にどういったご入用かは存じませんが我らが協力しますよ』

「ほっほんと！」

『何なりとお申し付け下さい』

ネストリはそう言つとカティの掌にあつた指輪を彼女の指に嵌め、その手を包んで口の中で何かを詠唱した。指輪がほんのり光り、熱

を帯びる。

「…これが契約？」

『はい。私の銘がこの指輪に刻まれました』

よく見ると指輪の本体の部分に先程までなかった細工が増えていた。

『ユホ。次はお前だ』

『…御意』

「い…嫌ならいいよ…？」

『まさか！身に余る光栄です。お手を…』

おずおずと差し出されたカティの手をユホは貴重な物を扱う様に自分の手に受け取る。そしてネストリと同じ様に詠唱した。また指輪が光りと熱を帯び、本体の細工はより複雑になっていた。

『これより我らはカティ様の為に働かせて頂きます』

「い…いや…そんな大層な物じゃなくて…ただちよっとお手伝いして欲しいだけなんだけど…」

『御意』

こうしてカティの崇拝者が天界から魔界まで広がった事にカティ自身はまだ気付いていなかった

魔具（後書き）

なんだかユホとカティをかけると思わず関西人の血が騒いでノリ・ツツコミになってしまつて修正が大変でした（笑）

そして、どんどんカティ心酔者が増えていきます。

罪な天妃カティ。そして天然カティ。

その気はなくても目の前に現れた全ての者にロツクオンです（笑）

100年ぶりの再会

早速カティはネストリとユホに『魔薬』の説明を始め、それに使用する魔草がジゾリアス系である事を話した。さすがのネストリとユホも5000種以上ある魔草を短期間で集める事は難しいと語り、沈黙が三人の間に流れる。カティは沈黙に耐えられず思わず仰向けに草の上に倒れ込んだ。

「…打つ手無しかなあ」

ふうつとカティとユホが溜息を付く中、ネストリだけが思案顔でカティを見ていた。その様子気付いたカティが「ん？」とネストリに視線を向ける。

「…カティ様、昔兄上と魔の森で知り合ったんですよね？」

「え？あ…うん。そうだけど？」

突然全く頭に無かったヴェイニの事を振られてカティは驚くが、ネストリは手を顎に置き何やら考え込んでいる。「それで？」とカティは思ったがネストリの口から続きが出てこなさそうなので、そういえば昔ヴェイニとこの辺駆け回った、もとい…追いかけて回したと一人思い出す。「懐かしいなあ」と呟き、回想に耽っていたカティにネストリが話しかけた。

『兄上に連絡してみましようか？』

「兄上つて…ヴェイニ？何で？」

『兄上でしたら、一緒に採った魔草なども覚えているはずです』

「ええ…もう100年以上前の話だよ？」

ネストリはカティのその問いには答えず、口元に笑みを浮かべるだけだった。ネストリは脱いでいた外套に手をかけると、その内側から四角いクリスタルの板を取り出した。それを見た瞬間カティは勢い良く起き上がり、立ち上がった

「それ何!？」

『通信機です』

「通信機？」

『はい。これで兄上の執務室と繋がりますので』

「ほえ〜！魔具つてすごいねえ〜！」

ネストリはカティの感嘆な声を心地良く思いながら、そのクリスタルを地面に置き静かに口の中で詠唱する。そうするとクリスタルから光が伸び、それらの光が画面を形成した。まだ映像は安定していないのか不鮮明で音声だけが通じた状態のようだった

「…？ネストリか？」

画面の向こうから聞こえる低く響く声にカティは首を傾げる。カティの記憶にあるヴェイニはまだまだ幼さを残した男の子といった感じでこんな低音の響く声の持ち主ではなかった。気がつくユホとネストリは膝をつき画面に向かって敬意の意を示している。カティだけが立ったままで目立っていたので、横の二人に習おうとしたと同時にクリスタルの映像が鮮明になった

「……カ…ティ？カティ!!!」

その言葉と共に響き渡る打撃音にカティは思わず目を瞑ってしまつ。おそろおそろ目を開けると、どうやら画面の向こう側の男が壁に激突したらしい様子が見て取れた

『ヴェ…ヴェイニ？』

額を押さえながら画面に現れた男はやはりカティの記憶にあった姿ではなく、多少面影を残しながらも見目麗しい成人男性になっていた。しかし向こうにとってもカティを見るのは久しぶりで、つい確認の言葉が出てしまう

「カティ？カティなのか？」

「うん。久しぶり！元気？」

「…100年以上ぶりですそれは軽すぎるだろ」とその場で膝をつく二人ともが思ったのだった。

「カティ…は変わらないね？」

「そう？そうかな…。ヴェイニは見事に美形に育ちおって…ヴェイニのくせに…」

一瞬側に膝づく二人の空気が凍る。魔帝に対して些細な失礼でも懲罰、もしくは死の洗礼に値する、これは魔族の中での法と言っている物だった。二人に嫌な汗が流れる
が、言われた本人のヴェイニはとても幸せそうに笑う

「カティにそう言っただけだと嬉しいよ」

優しい目でカティを見つめるヴェイニを見て、「おいおい、最後の言葉を聞いてなかったのか？どう考えても褒めてないが…」と側の二人は思っただけ沈黙を貫いた

「やっぱりヴェイニだ…相変わらずキモイ！キモすぎる…！」

嫌みが全く通じないそんなヴェイニを見て震えるカティ。

「ひどいな」と言ってまた笑う魔帝を見て、「うちの兄（魔帝）はMなのかドMなのか？」と本気で心配する者が確かにそこに二人存在した。

100年ぶりの再会（後書き）

ヴェイニ登場です。

Mです！ドMです！（笑）

カティ至上主義な魔帝にもう少しお付き合い下さい（笑）

段取り

思い切りドン引きしてるカティを横目に見ながら、ネストリはヴェイニに『兄上』と声を掛ける。どうやらヴェイニはまだネストリが出し抜いてカティの側に行った事を根に持っているらしく、一気に彼の視線が鋭くなる。

「…ネストリ…（今度こそ）邪魔をするな」

もちろん彼の言葉はスルーして、ネストリも思い切り冷たい視線で対応する

『カティ様の役に立たないのなら通信切りますよ？』

「…カティの？」

『はい。兄上にしか出来ない仕事です』

「それは…カティが私に望む事か？」

『はい。それはもう！心から感謝されると思いますよ』

その言葉にネストリの横でカティが口元をヒクつかせる。ユホに至っては、尊敬する魔帝の今の現実を直視出来ず、ずっと俯いたままだった。

「…何を手伝えと言う？」

『具体的に手伝って頂くわけではないのですが、昔カティ様と遊ばれた時に、カティ様が手にしたジゾリアス科の植物をリストアップして頂きたいんです』

「…ジゾリアス？」

ヴェイニは執務室の椅子に座り、手で口元を弾きながら考えている

ようだった。その時突然ネストリの横のカティが叫ぶ。

「ああ〜！思い出した！ヴェイニ！っと…ヴェイニ様！」

「…カティ、ヴェイニでよい。で、どうしたのだ？」

「昔ジゾリアスの綺麗な花くれたじゃない！」

「花？…ああ、ディピアルダの花だな…」

「それ！それよっ！！私が探してたのは！！！」

ネストリがハツと息を呑む。ディピアルダの花と言えば、魔界の中でも生息地は限られており、しかもその生息地は地上からはとても遠い危険な地ばかりだった。懐かしそうに表情を和らげるヴェイニ。

「そういえば昔カティはよくあの花をくれと望んだな…」

「うん！くす…っもぐう」

ネストリが慌てて「薬の材料にする」というカティの頭を外套で包む。『ディピアルダを贈る』危険な地に咲くそれを贈るという事は、『愛しい人』という意味が込められているのをカティは全く気付いていない。よりによって恋敵の薬の材料にされていたなどと知ったらヴェイニは立ち直れないだろう…兄を思えばこそ、これは抹殺すべき真実と確信したネストリ。

『兄上！有り難うございました！それでは！』

「なっ！お前カティに触れて！！ちよっ…ちよっと待て！！おいっ」

ネストリはヴェイニの苦情も受け付けず一方的に通信を切る。そしてモグモグ言っているカティの頭を解放した

「ぶはっ！！死ぬかと思ったよ！！！」

『申し訳ありませんでした。ですがカティ様どうか…ディピアルダ

が薬の原料だという話は、内密に…』

「…どうして？」

『貴重な花ですので、……心が痛む者がいるのです』

贈り主は以外とガラスハートの持ち主だとは言わないでおく。

「え？ そうなの！？ じゃあ…採って来てもらうの…無理かな？」

『いえ、少量であれば問題ないかと…』

「ほんとう！？」

嬉しそうに飛び上がるカティにネストリの表情も緩む。

「じゃあ…その付近の土ごと20株ほど持って帰ってきて貰えると嬉しい」

『土ごと…ですか？』

「うん…出来ればまだ花の咲いてない蕾の状態の物をプランターで運んでもらえると直良し！ なんだけど…」

根ごとというのは聞いた事があるが、土ごとというのは聞いた事が無かった

「希少種なんでしょ？ そんなに大量に採取して貰う訳にもいかないから…土を研究して栽培出来るか試してみる！」

『魔界の花を…栽培…ですか？』

「うん。大丈夫！ 昔何種類か育てた事あるし…。あ…でも今うちの畑テロの結界が張られてるんだった…。神域じゃ育たないよね…」

『難しいかと…』

うーんとカティが唸っていると、ようやく立ち直ったユホがカティに声をかけた。

『困いを作るのはいかがでしょうか？』

「困いつて？」

『ええ。こういった…』

そういうとユホは地面に側にあつた枝で図を描きだした。さらさらと描かれるそれを感嘆の目で見つめるカティ。描かれたそれは地上にある物に酷似していた

「おおっ！ビニールハウス…！」

『ユホは優れた魔具師でもあるんです』

「そうなんだ…すごいね…」

『壁面材でしたら先程の外套の力をもつと強力にした物もございませので…カティ様も入室の際には外套を羽織って頂ければ…十分に魔草も育つのではないかと…』

「すごいっ！！すごいよっ！！ユホさんっ！！！」

『気に入って頂けましたか？』

少し不安げに見つめるユホにカティは満面の笑みを返す

「グッジョブですっ！！！」

というと親指を立てた。

『では…私はディピアルダの採集に、ユホはそのビニールハウスとやらの設置にかかりましょう。時間は少し生息地が遠いので5日はかかると思います。ユホ？それぐらいでとりあえず持ち帰ったディピアルダを保管しておく物は作れるか？』

『御意』

『それでは、カティ様。そのような段取りでよろしいでしょうか？』

「いいもなにも、完璧っ！素晴らしい！エクセレントっ！！」
『では、我らは一旦城に戻ります。何かあれば指輪に向かって必要な者の名を唱え石を回して下さい。それで通信が出来ますので』
「うんっ！ありがとう！」
『では…』

そういうと二人は一礼していつの間にか手にした外套を一振りして消えた。

カティはあつという間の出来事に夢を見ている気分で、その二人が消えた跡を眺めていた

段取り（後書き）

ちよつと長くなつたんですけど、会話が多いのでさくさくつと読んで頂けるかな？と思ひそのままUPしました

なんだか五帝よりこの3人の方がよっぽど良いメンバーになりそうです…

五帝が強烈な焼きもちを焼きそうで怖いです。

指輪

カティはこれで日の高い内に帰れると安心したのが悪かったのか、いろいろ寄り道をしてしまい、結局行きの倍の時間がかかって畑に辿り着く頃にはすっかり日も暮れていた

「つつかれた〜!!」

ラボに入っただけで荷物を下ろすと近くのソファにボタンと倒れ込む。目を閉じると今日あった事が頭に浮かぶ。

「えへ…ビニールハウス…」

新たに育てられる植物の事を考えるとカティの頬が緩む。しかも自分で手に入れようとすればとても20日では無理だったはずの魔草も手に入りそうで、全てが順調に行っていて怖いぐらいだとカティは考える。

そんなカティの思考を打ち破る様にラボの扉が乱暴に開けられた。そこにはカティが見た事も無い表情のテロが立っていた。

「テ…テロ!? え…ど、どうしたの?」

「何処に行っていたんだ…」

カティはあっという間にテロの胸の中に抱え込まれる。苦しいほどに抱きしめられた中でカティは苦しさの余り、テロから逃れようとがくと力が強められる

「ちよっ、テロっ! 苦しいっ!」

「カティ…天界でお前の波動を見失った瞬間、どんなに心配した

か…」

そついうとテロに更にぎゅっつと抱かれる。

「そんな事言ったって、魔草取りに行かなきゃ『魔薬』作れないでしょうが！」

「魔草？…という事は魔の森に近づいたのか？…これは？」

カテイの右手の指輪を見て、テロがハツとする。

「主従の指輪…？」

「主従の指輪？そんな大層なもんじゃないよ…これは」

カテイは魔の森からの顛末をテロに語る。途中ユホに首を絞められた所を話す時にはテロが『殺す』と言って出て行こうとしたのを必死で止めた。

「…というわけで、協力してくれるらしいです」

「…カテイ、この指輪がどれほどの事かわかってないのか…」

「え？単なる通信機の魔具でしょ？」

その答えを聞いてガクツとテロが落ち込む。ソファで頭を抱えるテロにカテイは首を傾げるばかりだった。

「これは魔具ではない。古の道具だ…。しかも…魔の弟帝いにしえと怒帝の契約なんて…」

「ええ！これ魔具じゃないの？ネ。ネストリ嘘ついた…でも何で？」

「……………」

『主従の指輪』の契約、それは神族・魔族共に自分が『主』と認められた者にだけ行う特別な契約で、その契約は長い生涯の中でも一度しか行われない。どの種族とも交わせる契約だが『帝』クラスの者がそれを結ぶ事はほとんど無く、五帝がカティとの契約を望んだがそれをテロはカティの精神的負担になると遠ざけていた。だがそんなテロの気持ちを知ってか知らずか、勝手にどんどん自分の価値を高めてしまうカティにテロは溜息を漏らす

その事をカティに説明するとさすがのカティも「ど・ど・ど・ど・ど・うしよう。破棄って出来るの？」と蒼い顔をしてパニックに陥っている。

「破棄は出来ない。もう指輪も外れない。諦める。それに魔の森にカティが近づけないのはどうしようもないのだから、協力して貰えるのならして貰えばいい」

「う…い、いいのかなあ…」

「せっかく結んだ契約だ有効に使ってやれ」

「う…うん。じゃあ…遠慮なく…」

頂垂れるカティにテロは顎に手をかけ上を向かせキスを落とした。そして突然の事に驚くカティの目を見ながら、

「ただし！私を差し置いてカティと契約しているというのは気に入らない」

と言うとテロは今度はカティの手を取り、ネストリ達と同じ様に指輪に詠唱しようとする。一瞬ぼおつとしたカティだったが、ハツと何をされるか気付き、慌てて自分の手を取り戻した。

「な、何してんのっ!？」

「私の名も刻む」

「刻まなくていいっ!!」

「それでは私の気がすまない」

「知るかつ!!!!」

この時はテロの詠唱を逃れたカティだったが、翌日起きた時には
しっかりと指輪の細工が変わってるのを見て、カティは「ううう
~~~~」とうなり声をあげたのだった

## 指輪（後書き）

一日ぶりです。

カティちゃっかりネストリの畏にはまっていた事が判明（笑）

## 初通信

その後カティは、朝晩の畑の仕事以外寝る時間はもちろんの事、ほとんどの時間をラボで過ごした。『魔薬』を初めて作った頃よりも格段と知識が増しているカティにとって、『魔薬』成分調査は以外と簡単に進んだ。

「やっぱりネットクは魔草の選択だったんだな。その他は単純な調査だもん。これ…」

魔草抜き『魔薬』が入った試験管を振りながらカティは「しかし…」と唸りだす。

「あの不味さは…何かしなくちゃ。ずっと飲むならあれは地獄だもん」

想像しただけでカティは自分の舌に何とも言えない苦みと渋みが広がるような気がし、「うえ〜」と舌を出した。そんな時、突然カティの手に嵌った指輪が濃紺の光を放つ。カティがそちらに意識を向けると思考が何かにずんと引き込まれる感覚に陥る

「…うう」

『…ティさ…カ…様』

カティの頭に響く声。『カティ様』と今度ははつきり聞こえてそれがネストリの物だとわかった

「ネストリ？」

『はい。今戻りました。特にそちらはお変わりありませんか？』

「うん大丈夫」

『ディピアルダの方を今からお持ちしたいんですが…怪しい格好をしていても研究室に入れて下さいね』

「ええ！？何その怪しい格好って…」

『まあ…それは後で』

それきり音が頭から消えた。「怪しい格好って何だ？」と首を傾げながらも、カティはネストリとユホが来た時の為にハーブティーの用意を始めた。そして目に留まった指輪を見てネストリと会話した不思議な感覚を思い出す。

「そういえば…これってテロとも契約してるんだっけ…」

次の瞬間カティは「テロ」と呟いて指輪の石を回していた。又ずんとかに思考が引き込まれる感覚にカティは驚いた。

『何だ…この感覚は…』

頭の中に響く声は正しくテロその人で…カティは特に意識もせず指輪を使った事を早くも後悔していた。

\*

「あ…の…」

『…カティ？カティなのか？』

「…う…うん。ごめん突然邪魔して」

『これは？…そうか。指輪の力か』

普段魔具などを使い慣れた魔族と違い、殆ど道具の力を頼らない神族のテロにとって、主従の指輪の力は初めて体験する感覚だった。

「…今大丈夫？」  
「ああ。大丈夫だ」

テロは五帝と長老達を前に議会の真つ最中だったが、カティから何かをしてくるなど初めての事で議会内容など、どこかに飛んでしまった。頭の会話に慣れない初めの内は、言葉を口に出してしまっていた。その微かな「カティ」という単語に反応した五帝は怪訝な顔でテロを見つめ、何も聞こえていない長老達は何がなにやらと戸惑った。会議を続けられない事は無かったが、テロはカティとの会話に専念したいが為に「続きの議会は明日にする」と突然彼等に言い渡すと誰かが反対を唱える前にすぐに席を立ち自室へと戻った。すぐに会話の要領を掴んだテロは、「しばらく誰も立ち入るな」と口で従者に出す言葉と頭の中でのカティとの会話を上手にこなした。それでも時々押し黙るテロにカティは「本当に大丈夫なのか？」と何度も聞き直す。そんなカティを抱きしめたい感覚になりながら、テロは執務室の椅子にゆつくりと座り、カティとの会話に集中した。

\*

「今どこに居るの？」  
「執務室でゆつくりお茶を飲んでるよ」

カティの脳裏に天界のテロの執務室が浮かぶ。ドルフィエという地上のコーヒーに近い物を飲んでるに違いない。

『ところで突然どうしたんだ？』  
「あつ…」

何となく指輪を使ったと言い出しにくいカティは慌てて口実を探

す。そして視線の先にあった透明なワインボトルを見て「あれだっ！」と思った

「『神水』持ってきてくれたお礼…まだ言っただけじゃなかったし」

「ああ、その事が」

あのテロに契約された日。目が覚めるとカティの側にワインボトルが大量に置かれていた。透明な水にカティはすぐ天界でしか手に入らない『魔薬』の材料の『神水』だとわかった。ほんとはテロの手を煩わせるのが嫌だったので、五帝の誰かに頼もうと思っていたのを彼が先を見越して届けてくれたのだった。

「ありがとう…」

『どういたしまして。どう作業は？』

「順調。魔草ももうすぐ手に入るから、結構早く出来るかも…」

『良かった…と言っているのかどうか…』

カティの身を滅ぼすかもしれない力を抑える事が出来るのは喜ばしいが、天界にも戻って欲しいテロに取っては複雑で、そんなテロの返答にカティは苦笑してしまう。

そんな時『トントン』とラボの入口が叩かれた

「あ…誰か来た」

『…何？カティ…今ラボにいるんだろ？』

「うん。どうして？」

『私の結界内に入れる者など普通の人間にはいない…。カティ…開けちゃ駄目だ。すぐ行くから』

テロの『普通の人間にはいない』というフレーズで先程ネストリが魔草を届けてくれると言っていたのを思い出した。



「大丈夫よっ！ネストリとユホが魔草届けてくれただけだと思っ  
から」

『…弟帝と怒帝が来るのか？』

「っていつか、もう来たみたい」

もう一度扉がトントンと叩かれる。カティは「はっ！っ！少し待っ  
て」と返事をした

「テロ来なくていいからねっ！お仕事ちゃんとして下さい」

『おっおい！カティ！？』

「あっすぐに来たら絶交だから」

『なっ！！』

「じゃね！」

カティはそういうと絶句してるテロを余所に引き込まれた思考を  
取り戻す。すると頭からテロの気配が消えた。すぐに指輪が淡い黄  
金の光を放つ。カティはその光を見てネストリの時と違う事に気付  
き、「受信者をこっやって色で判別するのか…」とふむふむと考え、  
その光に答えず、ラボの扉を開けたのだった。

初通信（後書き）

テロはほんとにカティの前では情けない…（苦笑）

## 怪しい訪問者

カティは扉を少し開け、その姿のまま固まってしまった。そこにはガスマスクのような面を被り、あたかも怪しい黒のフードコートを来た二人が立っていた。思わずカティは死を覚悟してぎゅっと目をつぶり、その時が来るのを待った。

しかし一向に何かが起こる気配が無く、恐る恐る薄目を開けるとそこには必死に何かを伝えようと頑張る二人がいたが、面からは『シユコー・シユコー』という空気が聞こえるだけだった。

『シユコー・シユコー』

「…もしかして…もしかしなくてもネストリとユホ？」

『シユコ・シユコ』

幾分息が返事に聞こえたカティはようやく落ち着いて二人を見る事が出来た。そして一人の腕の中にある透明のケースに入った花を見た途端、狂喜乱舞し今までの事が無かったかの様にすぐにを開け放った

「それディピアルダよね！お疲れさま！！さあ中に入って！」

そんな中カティの指輪が濃紺と朱色、交互に光る。

「あ…これで会話するって事ね…」

そう言つと意識を指輪に向けた。ぐんと思考を引き込まれる感覚がまたやってきて、しばらくするとネストリの声が頭に響く

『カティ様…驚かないで下さいと申し上げましたのに…』

「だつてありえないでしょ…最初ガスで殺されるかと思つたよ」  
『…そんな奴がこの結界内に入れるわけないじゃないですか…』

相変わらず音は『シユコー・シユコー』という空気音だけだったが、会話をするとやはり安心度が増した。

「これってユホも同時に会話出来るの？」

『さあ…どうでしょうか？ユホ？』

『大丈夫です。先程からきちんと聞こえております。しかし…これは結構な波動を使いますね…』

『そうだね』

ネストリは平気そうだったがユホは幾分辛そうな声が伝わってくる。先程テロと話した時も今も特に苦痛を感じないカティは首を傾げてしまう。

「え？これって波動使ってるの？」

『カティ様。どんな具も使用すれば波動を消費しますよ』

「ああっ！具で思い出した！ネストリの嘘つき！これ魔具じゃないじゃん！古の道具なんですよ！外せないってどういことよ！！」

『おや？どこでそれを？』

そういうと、ネストリであるう方の黒の男が指輪を嵌めている方のカティの手を取り、それを見つめる。

『この細工、これは…天帝ですか？』

「う…」

『五帝は契約するとは思いましたが…まさかそれより先に天帝が…』

「…知らない間にされたんだから…不可抗力」

『…………』

あえてカティの返事には何も答えず会話を続けようとしたが、それをユホが遮った

『申し訳ありませんが…このままの会話は波動の少ない魔族の私には少し辛いです。ラボの周りに魔具を設置させて頂いて宜しいでしょうか』

「あつユホ！ごめんね。何でもどうぞ設置しちゃって下さい」

ユホであろう黒の男は持っていたケースをネストリに渡すと側にあった鞆から小さなピラミッド型の魔具をラボの周りに設置していく。

そしてユホはネストリの側に戻り、ネストリの手からケースを返してもらった。今度はネストリが一つだけ色の違ったピラミッドの側に行き、手をかざした。するとパキンとラボを包む空気が変わり、その空気を例えて言うなら結界外の空気と似た感じになっており神域とは別の物になった。

そして二人はラボの中に入りようやく面を外した

## 焼きもち

黒いフードコートを脱いだ二人は天井から床まで辺り一面本と薬草だらけのラボの中を興味津々に見つめている。カティは二人にテーブルを進め自慢のハーブティを入れた。そして自分も椅子に座るとテーブルに置かれたケースを見つめる。

光り輝くディピアルダの蕾にカティは目を奪われていた。透明なケースを色んな方向から見て「ほっつ」と溜息を吐く

「昔はこの花の美しさがわからなかったのね…」

「そうですね。ディピアルダは魔界の求婚花としても人気ですから」

「そうなんだ。でもわかる！花が咲いてないのにこんなに綺麗なんだもん」

「…」

「求婚花」という部分を軽くスルーするカティに、ネストリは兄を不憫に思わずにはいられなかった

「でも…魔草だから今のあたしが触ったら…枯れちゃうよね？」

カティの頭の中に魔草が凄い勢いで枯れていった魔の森での事が思い出される。それに答えたのはユホだった

「いえ、ケースの中で作業して頂けたら大丈夫です」

「え？ケースの中で…どうやって作業すんの？」

「こちらの壁面はこのボタンを押して頂くと…」

ユホはカティの持つケース上部のボタンを押し、ある一面に手を

触れた。すると不思議な事に壁の中へ手が入り、ディピアルダに触れている。

「ええ！どうなってるの？」

『この一面だけ特殊な加工がされています。手には1μmの壁の膜がありますので、直接触れている感覚ですがカティ様の波動も遮断出来ます』

「すごい！！！」

『他にも乾燥や機器も上部のボタンで操作出来ますので』

「不思議ボツクス〜〜！！！」

カティは改めてユホを尊敬の眼差しで見つめた。

「二人のお陰で『魔薬』の完成にまた一步近づいたわ！ありがとう！」

『お役にたてて光栄です』

ネストリが答え、ユホが頭を下げる。

『ところでカティ様』

「ん？どしたの？」

『指輪が光ってますが…』

カティが指輪を見ると先程より強い黄金の光を放っていた。何か嫌な予感を感じたカティは二人に謝るとラボから出て屋敷に戻り、意識を指輪に集中する

『…ティ。カティ？』

「テロ…どうしたの？」

『カティ…すまない、指輪の件が五帝にばれた』

申し訳なさそうなテロの声が頭に響くが、カティには何が悪いのかわからなかった

「…？何か問題でもあるの？」

『…自分も契約させると言っただけ聞いて聞かない』

「はい！？」

テロとの契約ですら無理矢理だったのに、プラス五帝と契約と聞いてカティは意識を無くしそうになる

「絶対！天界から出さないで」

『…簡単に言うな。五帝全員が血走った目で前に立ってる俺の身にもなってくれ…』

「何で話しちゃったの！？と、とにかく契約はしないからね！皆にも他にもっと忠誠を誓う相手が出来るとか何とか言っただけで納得させて！」

『…怒帝とは契約したのに何故自分たちは駄目なんだと喚びている』

カティは頭の中に五帝がテロに詰め寄ってる所が楽に想像出来てうんざりする。

「神様が一人間と契約なんてしちゃ駄目だって言って」

『…』

テロは五帝と話しているのか、返答がしばらくなかった。そして聞こえた声はやはり申し訳なさそう

『天帝がまっさきに契約しておいてそれはない！…だそうだし』



かも天妃に忠誠を誓って何が悪い！と開き直ってる』

「…なら、今あたし邪魔されたくないの。契約しに来たら畑出入り禁止だからねって言って」

『それは俺もなのか！？』

「貴方の件は後で話しましょう。それより早く伝えて！！」

『…皆黙って、受入れたようだ…』

「よかった」とふうとカティは息を吐いた。五帝の愛はたまに胸焼けを起こしそうになると思いながら…

## 蠢動

足音を潜め、闇に紛れるように黒い外套を纏った者が人気の無い場所に作られた階段を地下へと下りていく。一つの灯りを手に持ち一言も言葉を発する事なくただ黙々と階段を下りる顔は陰鬱な表情の中で目だけをぎらつかせ、もし周りに人が居れば不気味に移った事だろう。

かなり長い時間階段を下りると広い空間に出た。そこには床一面に大きな陣が描かれており、それを見ただけでかなり大規模な術を使う事がわかる。外套を纏った者はその陣の中心に立つと詠唱を始める。力を注がれた陣は発光し、その空間が眩い光に覆われる

「…人ごときが」

ただ一言その者の姿が消える前に発した言葉。空に投げられたその言葉が届く先をまだ誰も知らない。

\*

カティの歓声が焔に響き渡る

「やったあ！！出来たっ！！」

ディピアルダの加工はユホのケースによって簡単に済んだが、ここからの魔草と今まで作った『魔薬』の基礎との調合はなかなか大変な作業だったとカティは首をゆっくりと回す。期限が近づくにつれどんどん酷くなる頭痛はカティの集中力を削ぐのに絶大な威力を発した。

「…もつと早く済むと思ったのに、でも最後、寝ないで頑張った甲斐があつたなあ〜」

約束の時間まであと一日を残して完成させた自分を誇らしく思いながら、試験管の中の紫の液体を見つめる目はうつとりとっていた。

「素晴らしい！エクセレント！！…皆にも今度は美味しいハーブティを入れてあげなくちゃ…」

テロや五帝が『魔薬』が出来ない時の事の重大さを理解して、ここ最近はお茶なんて事をしなくなった事も薬の完成を早めた要因だとカティは思っていた。

「ああ…また頭痛…」

痛みに顔を顰めて、カティは試験管の『魔薬』飲もうとするがその手を止める。

「飲むのはテロに完成を言ってからの方がいいか…」

カティはそう言うと痛みの中指輪の通信を使う気力は無いので、いつもと同じ様に机に突っ伏して畑に漂うテロの波動を探しながら痛みが引くのをじっと待つ。

その時、パキンと畑を覆う結界が壊れる音がした。そして結界が壊れた事によってテロの波動が薄れていく。

「…何？」

カティは頭痛で思考力が落ちているが、そんな脳でも今が異常事態なのはわかった。そしてテロの波動が消えていく中で急激に頭痛が酷くなつていく。

「あう〜テロ…ごめん。報告とか待つてられそうにないや…」

そう言うとカティは思考をはっきりさせるため、試験管の液体をぐいっと飲み干した。

「ぐう〜〜やっぱ、まっず」

カティが眉間に皺を寄せてその苦さに耐えていると、指輪が強い黄金の光を放つ。結界が破られた事をテロが察知したんだとカティは認識したが、先程よりは薄れているものの頭痛が完璧に消えておらず危険な予感がすぐ側まで近づいてる今、指輪に意識を持っていかれる訳にはいかなかった

「返事しないので察知してよね〜」

と言いながらカティは側にあつたフードコートを羽織つた。

「さあて、どなたさんがいらっしやっただんでしょうねえ…」

カティはこんな状況ながら口に笑みを浮かべて、これからの自分の行動を冷静に考えだした

## 蠢動（後書き）

お気に入りが入りが600件を越えました。

感謝カンゲキ ありがとうございます！！

どんどんこれから話は架橋に向かっていきます！

## マッドサイエンティストの笑み

それからのカティの行動は早かった。まずラボの前に爆竹草の種ともう一種類別の物を蒔き、自分は裏口から出てそこにも種を蒔いておく。

「ふふふ…今こそ取り扱い注意の実験よ」

普通の女子ならばここで驚き戸惑い、誘拐などがセオリーであるが、カティは笑いをとめられない。なぜなら、カティがさきほど纏った黒の外套の中には火薬系・幻覚系・毒薬系の草花がいつでも使用オツケーの状態でスタンバっている。これらの草花は安易に人体実験するわけにもいかず、いつもラボで眠っている物だった。カティにとってこの状況はそれらの実践実験に好都合で天からの恵み！と喜び、さらに侵入者は天帝の結界を強引に打ち破れる程の実力者という事もカティには狂喜乱舞する物だった。

「テロの結界を打ち破れるような奴に手加減なんていらぬよね。何使つかなあ。でも、まっ！作戦はいるよね。まず人数確認しないと」

カティはそう言うと屋敷の裏手にある大木へ向かった。そして大木に辿り着くと不自然に伸びているロープを引っ張る。すると大木にそって縄梯子がするすると下りてきた

「よいしょっと」

今日はたまたま外套の下がいつもの農耕スタイルのジャージだったのも幸いして、梯子をちょこちょことなかなかのスピードで上が

る。

大木には下から見る事は出来ないが、畑を見渡せる高さの所に屋根もある足場がきちんと組み立てられており、そこに着くとカティは縄梯子を上げて下から発見されないようにする。そして木に掛けてあった双眼鏡を使って畑を見渡した。

「おお捜してる、捜してる。で…見えるのが、畑にいち、にい、屋敷にさん、しい…、ラボに向かつてごお六七、七人か…五六七はラボに向かつてるから無視してもおっけ…指示してるのは？」

畑の入口付近にカティと同じ様に黒の外套を纏った者が立っている。周りの者との余りの不自然さにカティは自ずとそいつが指示者だと認識する。

「でも…どう見てもあの黒以外は普通の人だよね…」

衣服から見ても、少しチンピラ風な城下町の人間に見えた。カティは少しがっかりして自分の考えから使用する草花の危険度を下げた。

「五六七…ラボの仕掛け…大丈夫かな…」

カティが心配したのは仕掛け自体では無く、そこに向かう人の事で、ラボの前に設置した種は二種類で、爆竹草の種はその名の通り、小さな爆発音を出す物でその際に一瞬高熱を発する。その熱に瞬時に反応するもう一つの種がちょっと危険レベルが高い物でその成長した花を『幻睡花<sup>げんすいか</sup>』といい、その種から発する香りを吸い込むと強制的に逆説睡眠状態に陥り、脳は覚醒しているが、身体の自由が利かなくなる。そしてその間に本体に起こった事を幻覚と錯覚する。香りが消えてもその効果は有効で、強い気付け薬を嗅がせなければ

身体は覚醒しない。

「…後で治療しますので、頑張ってください」

カティはラボに向かって手を合わせた。残る四人に対して使う草花を決め、その段取りを考える。

「じゃあ、爆竹音と一緒に作戦開始しますか！」

そう言つとカティはその足場の上部から垂れ下がるロープを掴み、足場の端に立つた

「毎日一人農耕で鍛えた体力なめんなよつと！」

そして屋敷二階部分のベランダへ、ロープとともに綺麗な弧を描いた。その顔は昔マッドサイエンティストと恐れられた微笑みを浮かべていた



マッドサイエンティストの笑み（後書き）

書けば書くほど…恋愛ジャンル、間違ってる気がしてきた…（苦笑）  
ファンタジーの方が合ってますかね？

…テロが全然出てこないし…今回も一人で戦っちゃう気だし…  
どうしたものか…

拍手設置しました。

よければポチッと感想下さい！

## 圧勝

畑に爆竹の音が響き渡るのとカティが屋敷の二階のベランダへ下りるのは一緒のタイミングだった。ベランダから室内へ入ったカティはまず木の上の足場を発見されない為に、適当に近くの割れない置物を手に取り、渡って来たロープに結びつけ木の方へ投げ返す。

「ん〜ナイスピッチング！さあ〜と、屋敷の周りの二人からやつちやいますか」

そう言うときカティは窓から離れシートを何枚か洗面所から持って来て、それを全部結び長い紐状にするとベランダに結びつけ下へ投げ捨てる。外套から無色の液体が入った試験管を取り出すとそれを地上に降らせた。

「さて！素晴らしき吸着力を見せてくれたまえ。セキユパーチ」

そして今度は割れそうな置物を手に取り、思い切り窓に叩き付けた。大きな音をたてて窓は割れ、その窓から外の声が聞こえてくる。

「おいっ！！こっちで音がしたぞっ！！屋敷の裏だ！裏手に回れ！」

カティは二階のカーテンに隠れ、下に男が来るのを待つ。

「おいっ！！二階から地上に逃げたみたいだぞ！」

男達は二階から伸びるシートを見て叫ぶ。そして暫くすると地上から「なっ何だこれは！！」や「あつ足が…」と言う声が聞こえて

くる。その声を聞いてようやくカティはベランダに立った

「こんにちわ〜!!」

「なっ!?!」

頭上のベランダから聞こえる声に男達は啞然とする

「おっ…お前がカティ・ライタかつ!」

二人の男のうち一人がカティに向かって叫ぶ。カティはそれを聞いて自分の名前がかなり短縮されてしまっているのに顔を歪める。男達は下りてきやがれなど叫んでいるが、カティはそれをベランダの柵に肘をつけて見つめ、溜息を吐く。

「…人の名前ぐらいちゃんと言おうよ。あたしはカティ・サトウ・サルメ・ライタ」

「くそっ!もう少して五千万手に入るのに…てめえ何してんだよっ!」

「うるせえ!貴様こそ目的が目の前にいるのに微動だにしねえじやねえか…」

五千万という高額が自分の値段として付けられてるのにカティは驚く。

「あんた達の雇い主はえらい奮発したねえ〜。あつ、あんた達動かない方がいいよ!」

そんなカティの言葉を聞かず、男達はカティをそっちのけで言い争いを初め二人揃ってその場に倒れ込むと、そのままの体勢で動けなくなつた

「何なんだここはっ！」  
「くそう！動けねえ！」

勝手にどんどんドツボにはまっていく侵入者を見ながらカティは笑いが止まらない。

「「てめえの仕業かっ！」」  
「…てめえの仕業ですけど、あたし動かない方がいいって注意したじゃん」

カティが先程撒いたセキユパーチの樹液は1gで約1tまでの物質を吸着する優れたもので、一度吸着した物質は離す事なく、分離させるにはセキユパーチの葉を粉末にしたものを使わなければならぬ。シーツの側に撒かれていたが無色なので侵入者にはわからなかった。一人は倒れる時にシーツを触ったらしく、片手はシーツを掴んだまま中途半端に倒れている。

「おっ……」

男の一人が大声で仲間を呼ぼうとしたので、慌ててカティは外套から赤い粉末を取り出すと地上に向けて撒く。

「おやすみなさ〜い！」

赤い粉末は強力な睡眠薬で、男達はすぐに深い眠りについた。カティ撒く際に粉末を吸い込まない様にタオルで口元を抑えていた。

「（いつちよあが〜り！次行ってみよ〜）」

タオルでくぐもった声を出しながらカティは残りの侵入者が待つ  
畑に向かった。

## 圧勝（後書き）

すみません。

活報で拍手に小話と書いたのですが、設定で今日の夜まで見れない状態でした

今は見れます。

カティの実験被害者の小話です（笑）

拍手のコメもありがとうございます！

やはり感想を頂けると創作意欲が湧いてきます！！

感想って想像の源ですねvv

お気に入り登録650件、評価も1800ptをこえました。

言葉も出ないくらい感謝です。

これからもよろしく願いますvvv

## 切迫

事件が起こった時、テロは天界の各国を治める領主と順番に謁見室で謁見中だった。『魔薬』の期限が迫った中でカティの邪魔をしないようにと畑に降りるのを控えていた為機嫌は最強に悪く、くだらないおべっかを並べる相手に殺意を抱く事も屢々、手持ち無沙汰で手の中の扇を開いたり閉じたりで誤摩化していた。そんな中パキーンという嫌な音が頭に響き、思わずテロは手にしていた扇を二つに折ってしまう。そのテロの行為に領主は「ひいっ！」と自分に責めがあったのかと動揺した。

「ウーゴ」

側に控えていた五帝の中でウーゴも同時に反応を示していたのを視界の隅で確認した。すぐにウーゴが玉座に座るテロの側で膝をつく

「お前も感じたな…」

「はい陛下…天妃様の結界が…」

ウーゴの言葉を全て聞く事無くテロは玉座から立ち上がる。まだ怯える領主に対し言葉を発する

「今日の謁見はここまでとする。後は追って連絡を待て」

「ははあー」

頭を床に付け、平伏す領主に冷たい視線を向けるとテロは外套を翻し、謁見室を後にした。それに五帝も続く。天帝と五帝によって張りつめていた空気が、彼等の退室によって一気に緩む。何よりもそれに安堵したのは今謁見中だった領主で、テロの冷たい視線によ

って腰を抜かしその場から動けなくなっていた。

\*

テロは執務室に向かいながら必死に指輪の力でカティに連絡を取ろうとするが、一向に向こうからの返事が無い。

「出てくれ…カティ」

思わず出した声に後を歩く五帝にも緊張が走る。誰一人口には出さないが、カティの身に危険が迫っている事を感じ、まるで戦場に立ったかのような空気を纏っている。テロは執務室に戻ると部屋に設置された陣に立った。

「陛下…私達も地上に…」

カンデラが我慢出来ずに言葉を発するが、向けられたテロの視線に言葉が詰まる。その焼け付くような視線に動けなくなったカンデラ。ウーゴがカンデラをその視線から遮断する為に間に立つと背後のカンデラから「はっ！」と苦しげな呼吸が聞こえた

「ウーゴ…私の力を抑えてる暇はない。全力で安定に努めろ」

神族が地上に降りる際の力の半減には長い詠唱を必要とする。波動の力量にも左右され、テロほどの力だと本来かなり時間がかかる。しかしテロはそれを通常の四分の一の時間でこなすことが出来る。だがその時間も惜しいほど彼は今、切迫していた。

「御意。我ら五帝で保てる時間は1時間が限界です」

「充分だ。終わり次第一旦戻る。アウノを捜して領主の方は対応



させよ」

「御意」

言い終わるとすぐにテロは転送の呪を詠唱する。詠唱しながらもすでに意識はそこになく、カティの無事だけを願っていた。指輪の返事が無い事に不安が増していく。

「どうか…無事でいてくれ…」

テロが詠唱が終わるとともに呟いた言葉に五帝も祈りを捧げる。そしてテロの姿が薄れるとすぐにウーゴは表にいた警備兵にアウノの件を伝えた。そして五帝はそれぞれの執務室に戻り、各部屋の陣の上で意識を大気の安定に向けた

これまでにかけた時間約五分。

地上では50分の時が過ぎていた。

## 切迫（後書き）

初めて全くカティが出てきません。

さて…テロは間に合っんでしょっか

拍手のコメレスを活報で行っています

コメント下さった方は覗いて下さいませvvvv

## 誘拐

カティは双眼鏡で見た首謀者らしき人物だけに危機感を覚えた。その他は特に問題ないと判断して畑に真っ直ぐ向かう。どの薬を使おうか？と歩きながら考えているカティの鼻に一瞬何かか香った

「…何？」

畑に近づくとその匂いの正体はつきりしてくる。そしてその焦げた匂いに嫌な予感がしてカティの足がどんどん早くなる。

「な…なん…で…、どうして？」

目の前に広がる光景にカティはただ愕然としてしまう。大切に育てた薬草達が火柱を立てて燃えている様子にカティの膝が折れる。まだ火が発生して1分も立っていない筈のそこはすでに辺り一面火の海になっていた。

「だ…誰が…こんな酷い事…、あっ火…け…消さないと」

カティはとにかく火を消そうと立ち上がると、近くにあった水道からホースで水をかけた。しかし水を直接かけている部分でさえその火の勢いは収まらず、明らかに何らかの力によって燃えてるのだとわかった。

「あんの…黒服っ！！！」

カティの脳裏に首謀者の人物が映る。その時、叫び声がカティの耳に飛び込んできた

「やつ約束が違っじゃねえかつ!!!」

慌ててその声の方に駆けつけようとするが、いつの間にか火の壁に周りを囲まれて身動きがとれない状況になっていた。「ぎゃーっ!!!」という人の断末魔が同じ場所から聞こえる

「な…何?何が起こってるの?わっ私が目的じゃないの!??」

相手が内部で揉めている状況に訳がわからなくなる。

その時背後から聞き知った声が聞こえてきた。

「お久しぶりですね。天妃様」

「っ!!!」

カティが相手の名前を言おうとした瞬間に首に手刀を落とされ、そのまま黒服の人物に倒れ込む。倒れ込んで来たカティをそつと抱きかかえるとその人物は指を弾いた。すると今まで火柱を上げて燃えていた畑から一瞬にして火が消えた。

「『天帝の銘』の力にもう少し手こずると思いましたが、何故でしょう…?その力がほとんど薄れていますね」

黒服の人物は前髪をあげカティの額を見た。『魔薬』を飲んだ直後のカティの額には銘の紋章は無い。

「まあ、予想外の事ですが、おかげで計画が遂行しやすくなりました」

意識のないカティに黒服は語りかけ続ける。

「さて…この犯人にはあの者達になつて頂くとして、あの御方の意識を逸らせる為にも、多少の時間稼ぎに天妃様の代わりの遺体を置いておかねばなりませんね。おや？主従の指輪？これはちょうどいいです」

そう言うと黒服の人物はカティの髪を一房切り、それを握った指先を口元にもつていき詠唱する。するとカティの着ていたはずの服が宙に浮き、それにカティによく似た人型が形成される。そして黒服がそのまま、指を弾くとその人型が燃え上がった

「そして…仕上げに」

裸になったカティに自分の外套を着せ横たえる、そして主従の指輪を嵌めた手を握るともう一度詠唱する。すると主従の指輪は歪な変形を繰り返しながら、カティの指から外れた。その指輪を燃えた人型の指のあつた場所に置く。

「これで完成です。しばらく時間は稼げるでしょう」

黒服の人物は横たえたカティを抱き直す。そこには灰色の髪をなびかせたアウノが微笑を浮かべて立っていた

誘拐（後書き）

お久しぶりです。

GWは全くPCを触れませんでした。

あと…サイトをFlashで作っていると…時間が…（ぐはっ！）

あ…出てきましたよ！アウノです。

## 静かな地

テロが地上に降りて一番最初に感じたのは違和感だった。結界が破られたからには何者かの侵入があったはずなのに、そこに広がるのは静けさだけだった。

「…か…てい。カティ！！カティ！！！」

声が自ずと叫び声になる。館の前に降り立つとテロはすぐ中に入り、「カティ！」と呼びかけながら一つ一つの部屋を捜して回る。荒らされた形跡もない部屋。ただ2階の一室だけ窓ガラスが割れて風が部屋の中に入り込んでいた

「カティっここにいるのか!？」

だがやはり呼びかけには反応がない。ベランダに出ると、記憶にある睡眠薬の香りがした。

「これは…カティ？」

ベランダにくくり付けてあるシーツを見てテロはカティがここから脱出したのだと考え、身を乗り出して辺りを見渡した。そこで目にした光景に啞然とする。遠くに見える畑は全て焼けて黒土と化し、そしてシーツが下った先には直視するのも堪え難い無惨な屍があった。

「か…てい？」

ドクンと心臓が跳ねる。すでに肉の塊のようなそれは2階からは

性別すらも判別出来ない。テロは必死に自分の中の波動を抑える

「カティはずがない……」

自分に言い聞かせるように、何度も呟きながら、空を飛び地上へ降りる。息苦しさに胸が詰まる。そして地上に降り立った瞬間にその塊が人の男性だったとわかった瞬間、安堵に詰めていた息を一気に吐き出した。

「人間…カティを襲ったのは人なのか…」

テロが口の中で呪を唱えると、地上の土が生きているかの様に屍を覆いつくす。そして全てを覆いつくすとそこは何も無かった様に普通の地に戻った

「人が私の結界を…まさか…」

テロは次にラボに向かう。ラボであった筈の場所にも同じような無数の屍と建物自体は焼失していた。

「カティがこれを行ったのか？」

だがテロは言うてすぐ首を振った。そして先程と同じ様に呪を唱え屍を地上に戻した

「カティが行うにしては残忍すぎる。これは薬でどうこう出来るものではない……」

あきらかに何らかの力がなければ、このような姿になるはずが無いものばかりだった。それにカティは薬の実験などで人に対して悪



戯をする事はあつたが、命を奪うような物を行った事はなかつた。そしてラボに残る呪の気配に焼失の原因は何者かの呪だと確信した

「カティ…どこにいる…早く私を安心させてくれ…」

頭の中に炎に囲まれたカティが浮かび、それを消そうとすると先程の屍に移り変わる

「カティ…カティ」

最後に向かつたのは、妻が大切にしていた畑。ベランダから見た光景を間近で目にしてテロは息が止まる。色取り取りの花が咲き乱れていた畑は、何もかもが燃え尽き、そこを風が表面の灰となつた物を浚つているだけの地になつていた

「はっ…く。…カティ！カティ！」

誰もいないとわかつているが、それでも声をかけ続け畑を歩き回る

…そして見つけた。

水道の側で俯せになつた物を…

「…火を…消そうと…していたの…か？」

そんな事をする者はここでは一人しかいない。だがテロは認めたくなかつた…

少しずつそれに近づこうとするが足が思う様に動かない。

だが近づくにつれ、今までの屍と違いがわかる。人の形が残るそ

れには見慣れた衣服が焼け残っていた

「あ……っあ……」

そして指先に残る歪な形の指輪を見た瞬間頭が真っ白になった

そして辺り一面、白の世界に覆われた。

静かな地（後書き）

あゝまた時間が空いてしまいました。ごめんなさい  
テロ視点です。さて…カティ？を見つけたテロはどっになっちゃった  
でしょうか…

HP進んだどお！もう少しで公開出来そうです！  
（言わなきゃしないから、自分を追いつめる！）

## 再会

光の力が強く、白となった世界はテロと彼に抱きかかえられた者以外の全てを飲み込み、カティの畑だったそこがどんどん無と化していく。

「カティ…カティ…」

テロに抱きかかえられた骸はどんどん朽ちる。彼はそれを止める術もわからず、ただ抱きしめ、涙した。そしてそれが朽ち果てる瞬間テロの中に違和感が生まれる。茫然とした中で彼自身にもわからない何か在必死に頭を働かせようとしている

「…？…何故…」

テロは目の前に骸を見て、もともと天帝の銘で延命していた命なので、骸が銘の消失と共に身体が朽ち果てるのは理解出来た。だがある一つが決定的に足りないと感じた。カティの遺体であったならば朽ち果てる際に香る物がそれにはなかった。

「…魔薬」

魔は一度本体に接種すると必ず何らかの香りを残す。カティの身体には魔薬から接種した魔の香りが肉体に染みているはずなのに、この骸にはそれがなかった。

「これは…カティじゃない？」

周りの光が徐々に正気を取り戻すテロの中に戻る。収縮する光を

身に治めながらはつと自分が暴走状態にあつた事を理解した。そして慌てて周りを見渡して被害状況を確認する。地上全てを無にしてみおかしくない暴走。しかし、被害は思った程出でならず半径2km圏内の物を全て消失した程度だった。これならばカティの敷地内で他に害は出ていないだろうとほっと安心して息を吐き出す。しかし力を抑えていない自分の暴走に対してこの被害は余りに少なく疑問が残る

「…？これは…？」

『正気に戻ったか…大馬鹿者め』

聞き慣れた声が頭上から降り注ぐ。見上げると空中に浮かぶ人物は逆光で影しか見えなかつたが、それは良く知つた人物だった

「…ヴェイニ」

『テロ久しいな…。全く太陽のような波動が爆発したと思つたら…お前だつたのか…』

『まあ…だいたい予想はしていたがな…』とぼそりと呟き。ヴェイニはテロの側に下りる。テロが覚えているヴェイニはまだ幼さの残るカティと一緒に遊ぶ少年だったが、久しぶりに見た彼はもう青年も通り越し、熟成された魅力の持ち主となつていた

「…という事は…これはヴェイニが？」

『ああ。あのまま放置していたら魔界まで消滅させられかねなかつたからな。カティの敷地に置いてあつた魔具の緊急装置を作動させて結界を張つた』

「…いつの間にそんな物を…」

『お前が幼少の頃波動の暴走でカティの屋敷に滞在している時があつただろ。その時に何かがあつた時の為に一応設置しておいた物

だ』

100年以上前の魔具に助けられたと知ってテロは目を見張った。

「よく動いたな…」

『俺が作った物だぞ。半永久的な遠隔操作可能な装置に決まっているだろうが。カティが地上に降りてからは動かす為の波動もここには大量にあったからな』

そういえばこいつも『魔具の天才』と言われていたとテロは今更  
思い出す。

『そんな事はどうでもいい。お前がそのままの力で降りて来てる  
という事は大気の安定は五帝がしているのか？』

言葉を出さずにテロが首を縦に振る

『緊急事態か…何があつた？ネストリから聞いた話ではカティと  
交信が出来ないそうだが？』

「…わからない。ただ、カティが何者かに連れ去られた事だけは  
確かだ。外れる筈の無い主従の指輪が外されてる事を考えると…」

『古の禁術か…』

「…ああ」

『誰か犯人に心当たりはあるのか？』

ヴェイニの言葉にテロの口がぎゅっと引き締まる。『古の禁術』  
それは天帝・魔帝のみに伝承される書物の中に存在するもの。自分  
の側でそれを閲覧出来る可能性がある者はおのずと限られてくる。

『…まさか…あいつが…』

テロの頭に灰色の髪をなびかせ緩やかに笑う人物の顔が浮かんだ

…

## 再会（後書き）

え〜。カティとテロとヴェイニの関係ですが、書ききれてませんね  
（汗）

テロが一番年上で、次いでヴェイニ、一番年下がカティです。

一時期三人とも地上にいた時期が重なったので、いわゆる昔なじみ  
です（幼なじみはカティとヴェイニです）

さて次回は連れ去られたカティの行方ですよ〜！

拍手でコメお待ちしてます！



## 寄生植物（前書き）

カレイ  
主人公が痛い目にあいます。  
苦手な方はスルーして下さい

## 寄生植物

水がカティの頬に一滴落ち、それによってカティは深い眠りから覚醒された。まだ不明瞭な視界に映るのは薄暗い部屋の中に壁も見えないぐらいに増殖する植物だった。自身はかるうじて身体が隠れる程の薄く太ももの中ほどしかない丈の短い外套を羽織らされていた。動きはその部屋にある植物に封じられており、よく見ると自分の両腕と両足の太ももの部分に植物が埋め込まれていた

「…き…せい…しょく…ぶつ？」

寄生植物とは寄生した相手から栄養を吸い取り自分の糧にする魔界の植物だったとカティは徐々にはつきりする頭の中で考える。ただこの植物に見覚えはなくどんな寄生の仕方をするのかはよくわからなかった

「ああ、気がつかれましたか？」

カティが顔を向けると視界の外からアウノがゆっくりと自分に向かって歩いてくるのがわかった。カティは言葉を発する事なくそれを見守り、彼はカティの目の前まで来るとそこにあつた椅子に腰をかけた。アウノはゆったりと手をお腹の辺りで組み、リラックスした体勢でカティにじっと視線を向ける。

「『マジュリユリア』はいかがですか？痛みは無いと思うんですがね」

「…マジュリユリア？」

確かにカティの身体に何かを埋め込まれているが痛みは無かった。

カティは頭の中にその植物の名前を捜してみるが思い当たる物がない

「ええ。『マジユリユリア』魔界の言葉で『咲き誇る大輪』というらしいですよ？ちなみに天妃様はもう察せられてるとは思いますが、寄生植物です。魔界の最下層にある植物で危険度はSSランク。他の世界で手に入れる事はおろか、魔界ですら手に入れる事が難しい希少植物です」

「な…んで、そんな物を責…方が…」

危険度SSクラスの植物など、世界間を渡らせる事はもちろんの事、生息地ですら移動は厳重に管理されている筈の物である。

「どうですか？薬学師としては非常に興味を持たれるんじゃないですか？」

「この状…態で、興味な…んか持つ…わけ…ない」

「それは残念ですね」

心底残念そうに言いながらも笑っているアウノの口元にカティは理性が切れそうになる

「今からこの植物の効能、というより生態を紹介しようと思いましたが、」

「……」

「まあせつかくですから、聞いて下さい」

アウノはそう言うと席を立ち、カティに近寄り手を添わせようとした。不快感からカティは身を抜いて逃げようとするが、植物に身体を固定されていて、思う様に動かなかった。

「この植物は別名『鮮血花』と言われる物で、その名の通り寄生する相手は血です。表皮に近い血管から侵入し」

アウノの手はカティの頬を一度優しく撫でると、そのままカティの植物が植え込まれているであろう腕の部分へ向かいそこを一度撫でる。そしてそのままアウノは説明を続ける

「より新鮮な血を求めて人の部分で言うと骨髓内の赤色髄に辿りつきます」

カティに添えられた手が腕からどんどんと肩に向かいそのまま身体を降りて腰の辺りで手が止まりその辺りを軽く撫で続ける。そこは丁度腸骨の辺りで一番骨髓が集中している所だった。カティは撫でられる感覚に吐き気を覚える程の嫌悪を感じるが、ぐつと歯を噛み締めて耐える

「そしてそこで全ての血液を宿主から奪い、本体が絶命の瞬間、大輪の花を咲かせるらしいです。私も実物では見た事ないのでどのような花が咲くのかは存じませんが、天妃様でしたらそれはそれは素晴らしい花が咲くのでしょうかね」

カティはうつとりとそう言うアウノに愕然としながら、ただだるさが身体全体を包んでいる状態が、実は血をどんどん搾取されている状態だと聞いて更に顔色が青くなる。カティの身体に無痛の状態で行われているそれは今彼女の中をどれほど浸食されているか本人もわからず、ただ部屋一面の植物の状態から推測して、かなりその植物が成長をしている事は間違いなかった。

「な…んで？こん…な…こと…を？」

カティの問いにアウノはぴたりと腰を撫でていた手を止める。そしてカティに視線を合わせると、今までで一番優しい表情でカティ

を見つめた

## 寄生植物（後書き）

は〜い！カテイ捕まっています！

しかも寄生植物なんて埋め込まれています  
そしてアウノの理由はまた次回です！

お気に入り登録が700件を越えました

ありがとうございます（感涙）

おまけに評価も1950ptを越えて…ほんとに驚きとともに感謝  
でいっぱいですvv

## 昔話 その1

アウノはカティに柔らかい視線を向けたまま元の場所に戻ると再び椅子に腰掛けた。カティもアウノから視線を外さずすと睨み付けている

「天妃様。少し天界の昔話をしましょうか…」

「むか…し…話…？今…関係…あんの、それ？」

アウノはカティのその質問には答えず、椅子に深く腰掛けるとお腹の上で手を組んでリラックスしているような雰囲気醸し出す。だが、カティには何かが引っかかった。

「…聞かせて…もらおうじゃないの…その…昔話…とやらを…」

「長い長い昔話ですよ」

アウノはそう言うと言った

「昔、天界のとある家に生まれた娘の話です。その娘は人嫌いの神族の家に生まれました。夜毎、その家では地上を覗く水鏡で人を見ては蔑み、酒の肴にするという宴が同じ考えを持った神族によって開かれていました」

カティはアウノの言葉に天界に居た頃の自分を思い出す。口では敬う言葉を言いながらも決してその蔑みを含んだ視線は変わらない。目は口程に物を言うという地上の言葉をどれほど頭で繰り返しただろう。神と名の付く者が偉いなんて誰が言ったのか、こんなにも自分に酔いしれ、他を蔑む事しか出来ない種族なのに…と何度思った事だろう。

「…昔も…今も…変わらない…世界…ね」

「とんでもない。今の天界など昔のそれと比べると表立った人間排他の神族はかなり減りましたよ。でなければ貴方が天妃など…テ口様がそれを強く望んでも敵わなかったはずです」

「…おお〜『貴方が…天妃など』ねえ〜何気に…貶され…てるなあ…」

カティは決してアウノが嫌いではなかった。裏で自分を蔑む神族達の中、彼はカティに対して『気に入らない』とはつきり言葉にした。だがそんな言葉を向けたにも関わらず天妃として、そして天界で人として生き抜いて行く基本を教えてくれたのは紛れもなくアウノだった。天界から地上へ降りた時にもアウノの言葉はそれ自体はキツかったが、色んな意味で限界だったカティにとっては救いの言葉だった。それがわかっていいるからこそ、テロや五帝達もアウノに対して何も処罰をしなかったのだ。

「…まさか…ほんとに…殺される程、憎まれてるとは思わなかった…」

カティの呟いた言葉は小さく、アウノには聞こえない。

「中断し…て、ごめん…なさ…いね。…で、その娘が…どうなったの…よ…」

話が止まってしまったアウノにカティが先を促す

「その娘は、ある日好奇心から誰もいない時にその水鏡を覗いてしまったのです。そしてその時から不幸の連鎖が始まりました。娘はその時水鏡に映った人族の男に興味を持ったのです。その娘は甘



やかされた貴族の娘、世界は何でも自分の物になると思っていました。とくに地上など、人嫌いの家に育った彼女にとっては奴隷も同じ。手に入らない筈が無いと考えてしまったのです」

「…さい…あ…く」

「そうですね。最悪でした。彼女にとっても、その人族の男にとっても」

そう言うアウノの視線はカティから外され、その瞳には何も映っていないようだった。まるで語った言葉が、自分の出来事のように空を見つめている

「…?」

「不思議に思うでしょうが、娘にとっても不幸だったんですよ。何故なら神族としては当時、彼女の考え方は普通だったからです。そのまま水鏡で覗くだけにしておけば良かった物を、彼女の欲求はどんどん増していきました。そしてある日、波動が強かった娘は父親の目を盗んで、その頃は禁術とされた地上への呪を使い、その人族の男に会いに行きました」

カティは自分が捕われている事を忘れるぐらい、アウノが語る話に引き込まれていったのだった

昔話 その1（後書き）

長い…ほんとに長いよ。昔話。

全然アウノが何でこんな事したのか出てこないじゃん…!!

…すみません。もう少しお付き合い下さい

## 昔話 その2

カティと同様にアウノも自身の話に引き込まれているのか、今はカティの方へ意識は無かった。カティは話に引き込まれながらも、必死にアウノに感じた違和感を突き止めようとしていた。何かか？何かがおかしいのに貧血によって霞んだ頭ではそれが何かわからない。そしてアウノは話を進める

「神族の容姿は基本的に男女問わず優れています。男に会いにいった娘を見て、男も一目で恋に落ちました。人族の男に触れ、初めて娘は他人の目を通さない人族のほんとの姿を見ます。そして自分たち神族が波動の恩恵を怠慢で返し、神族同士の虚栄世界の中でいかに傲慢であったかを知ります。その後、娘は男に進められても天界に戻る事を拒み、地上で生活する事を選択するのに何の迷いもありませんでした」

娘の最初の印象は『最悪』、だが話を聞き進むと『無知』だっただけだとわかる。カティはもつとその娘の話の話を聞きたかった。カティ自身は地上を捨てて天界で生活する事を選んだ。カティは世界こそ逆だが、今まで生活していた空間を捨てるという共通点を娘に見い出すと娘の未来が自分の未来に見えた。

「どう…なった…の？むす…め」

「男と夫婦になった娘は他の神族からすれば鼻で笑われるような小さな小さな幸せにも心が満ち足りていました。波動を使う事なく、自給自足の生活に満足し、日々自分たちの手から生まれる物に泣いて感動していました。ただそんな生活を永遠に続ける事は出来ませんでした」

少し険しくなったアウノの表情に、カティも息を呑み、顔がぐつと引き締まる

「その頃娘の実家では娘が家出をしたと噂になっていましたが、外聞を気にした当主が娘は病気になり屋敷に籠っていると言葉で対外的には対処し、必死に裏で娘の行方を捜していました。そんな緊急事態だったので誰も水鏡を見ず、そこに映る愛しい娘が汗をかきながら畑を耕している姿など知りもしなかったのです。天帝や五帝ほどではないにしても娘も神族、自身の身体から流れ出る波動に対して何の対処もせずにいると、10年の年月を掛け少しずつ地上のバランスに影響を及ぼし始めました。」

「…影…響って？」

「天帝の縁者であった娘の波動は天の属性、つまり万物に対して影響が始めました。どれほど当時の天帝が万物の均衡を測ろうとも、水は豊かになりすぎ水害を生み、地は栄養を貯蓄しすぎて作物は弱くなり、力を持った風は突如突風となり人々を襲い、火は自然発火し森を焼き払いました」

「…千年前の未曾有の天災」

それはカティが学校で習うような歴史の中の出来事だった。地上の各所にその文献が残されており、地上世界で同時期に起こった未曾有の天災だと習った。

「違和感を感じた天帝は地上に降り、天災原因1000年を重ねた神族の娘を捜し出します。どうしても天界には戻りたくないという娘の話聞き、ならばと天帝は娘の波動に制御をかけ地上で暮らす事を許可しました。しかしそれに黙っていないのは娘の家でした。家出どころか地上において人族の男との結婚など、人族嫌いの家主にとっては屈辱以外の何物でもなかったのです。家主は地上の娘の元へ降り、激情に任せた波動によってそこにいた男と男の家族、10

年培つて来た娘の家族を皆殺しにします」

「…ひどい」

「娘は泣き叫びました。ですが天帝によって波動に制御を掛けられた娘は父に対して何の抵抗も出来ません。夫と共に死のうにも娘には死ぬ事が出来ないわけがありました」

「わ…け？」

アウノが視線をカティに戻す。その瞳は何の感情もないガラス玉のようだった

「娘のお腹には男との間の子が宿っていたのです」

カティの頭に天界の医者言葉が蘇り、心臓が掴まれた様にぎゅっとなる

「天妃様も聞いたでしょう。神族と人族が子を生ずる確率。そんな物はこの時まで存在しなかったんですよ？」

「まさ…か…」

「100億分の『1』は娘が宿した子」

カティの頭の中で数字の羅列でしか無かった物が、突如人の形になる

「実父に夫を殺されても、娘が残した『1』」

そのアウノの言葉はカティに向かってではなく、呟く様な声だった

昔話 その2 (後書き)

まだまだ…まだ…まだ…

ああ…先が長い…

アウノ…話長いよう…

### 昔話 その3

感情が全く見えなくなり、まるで全ての存在を拒否しているかのような暗い瞳のアウノに対してカティイはかける言葉を持っていなかった。彼が娘の父親の神族に怒っているのか、それとも人の子供を宿した娘に怒っているのかそれすらわからない。

「娘はその後天界に連れ戻され、子供を宿した事を知った当主によつて屋敷の暗い地下牢に幽閉されます。娘の自我を保たせていたのは腹の子の存在のみ…そんな危ういバランスの中で娘は生きていました。そして腹の子が産まれた途端、娘は自分の子供を子供と認識する事も出来ず、ただただ父親への恨み言を口にするかと思えば、5歳児に戻つて人の子だと自分の子供を蔑み…、狂い死にしました」  
「…つな…んて事」

カティイの目に涙が浮かぶ。娘を思つて泣いているのか、その子供のために泣いているのか自分自身にもわからなかった。

「崇高で気高き存在と言われた神族の本当の姿はこんな物です。その子供は神族のそんな汚い部分を一身に浴びて育ちました。何をしても蔑まれ、「人の子」だと罵られ、屋敷の地下から一步も外に出してもらえず、そんな天界が嫌になり脱走しても波動を上手く扱う事も出来ない子はすぐに連れ戻され、体罰を受ける。何の為に産まれ出たのか？そんな事も子は考えられなかった…それすらも知らなかったからです」

アウノは一度ぐつと唇を噛み、今度は力のある視線でカティイを見据え、言葉を発する

「……貴方はそんな哀れな子を……また生むつもりですか？」  
「……っ！」

カティはここに来てようやくアウノが自分に何を言いたかったのか理解した。『人族と神族の子供』それはテロと自分の子供にもあてはまる事であり、両親の愛情を与えられても、天界で受ける待遇はこの子供と変わらないという事実には愕然とする

「テロ様は神族でありながら、人族に対して神族と同等、いえそれ以上の感情を持っていらっしやいます」

「……テロ……が……な……んで？」

「ずっと虐げられてきた子は10歳にして産まれてから何も変わらなかった生活に初めて転機が訪れるんです。ずっと娘の当主がひた隠しにしてきた娘の子を含む事実が全て明るみに出ます。それを知った前天帝はすぐに子を自分の養子として保護しました」

カティの脳裏にある予測が過るが、感情がそれを否定する

「天帝も天妃も自分の息子と変わらず子に愛情を注いでくれました。そしていかに人族を蔑ろにする事が愚かな事か自分の息子に伝えます。子は初めて愛情を注いでくれた存在に戸惑いながらも、徐々にそれを受け入れ、成人する頃には必ずそれに対する恩返しをする事を誓います」

「……ア……ウノ……貴方……まさか……」

「今では何故前天帝が人を擁護する事を、テロ様にお教えしたのか……その為に彼は愚かにも人族の天妃を擁立してしまった」

アウノの視線はまっすぐカティに向けられている。それがカティの質問の答えだといわんばかりに……



「私の存在が彼の人族に対する感情の基盤を作ってしまったのだと自分の存在を呪うばかりですよ。ですから私自身の手で軌道修正しなくてはなりません」

アウノの顔には微笑みが浮かんでいた

### 昔話 その3 (後書き)

おしっ！昔話終わり！！

あ…ジャンル登録変えました…

何だか『恋愛』ジャンルに疑問だったんで…(苦笑) 『ファンタジ  
ー』に変えさせて頂きましたv v

サイトOPENしました

サイト名 P o n d e V a n i l l a

アドレス <http://vanillice.com>

## 静かなる怒り

テロはヴェイニを見据えながら立ち上がり、今まで腕の中にあつた者からカティの指輪を外すとそれを投げ捨てた

『で、どうす…』

話しかけようとしたヴェイニがテロの顔を見た途端に言葉を無くす、それはその他の者を寄せ付けない神々しいまでの神の顔。

「少し、おいたが過ぎますね」

『…』

波動ではなくテロ個人が纏う空気によってヴェイニはまだ言葉を発する事が出来ない。纏う空気が変わると口調も変わりヴェイニも見つた事が無い審判を下す神がそこにいた

「いくら私でも、許容範囲という物がありますよ。アウノ…」

テロはアウノがカティに天妃を辞めるように進言していた事も知っていた。しかしそれはカティを思つての事だと理解していた。半人族という似た立場によつてカティの事を守ってくれているのだとそう考え、地上にカティが戻る事も許可した

『テロ…』

「さて、お仕置き時間ですね。ヴェイニこの結果はどれほど持ちますか？」

『ああ？馬鹿にすんなよ…』

態度は大きいながらも瞳は不安げに見つめるヴェイニに「そういえば、昔からこういう天の邪鬼な態度が可愛かったな」と思い出してテロはフツと笑って返す。

「大丈夫ですよ。今さっきの暴走のような力など出しませんから」

そういうとテロの頭の中に天界で地上の安定をはかっている五帝が浮かんだ。「きつと、今の私の力で誰かはやられているでしょうね」とテロは苦笑しながら考え、それらを考えられる自分に冷静さが戻って来たかと判断した。

「では…行きますか」

『行くって…カティが何処にいるのかわかっているのか?』

「この世界に私から逃れられる者などいませんよ」

そう言っただけでヴェイニに振り向いたテロの顔は笑みを浮かべていたが、瞳は決して笑っておらずそれだけで向けられた者を燃やしつつしてしまいそうな熱さを含んでいた。そしてその視線で固まったヴェイニから意識を外し、目を瞑り、三世界全ての気配を探る為、精神を統一させる。

「地上にはいない…。…魔界…いない。…天界…にもいない?…という事は…やはり時の歪み…」

地上と天界の間には時の流れの違いによって歪みの空間が存在しており、それが『時の歪み』と呼ばれる場所であった。この空間は天帝の支配する世界ではなく、転移術によって移動する者達は本来その空間の存在すらも認識する事が出来ない。しかし禁術と同様にその存在は天帝・魔帝にのみ引き継がれ、直接手を下す事は無くても、常にその存在を意識しなくてはならない場所だった。

『時の歪み…だと？』

「ええ。どうやらアウノはカティを連れてそこに居る様です」

『何て事だ…あそこに人のカティを連れて行くなんて…』

ヴェイニが唇を千切る勢いで囁む。

「大丈夫です。魔薬で抑えられている身とはいえ、カティは天帝の銘を持つ者。多少の時空の歪みには耐えられます」

『そもそも…お前がカティを天妃なぞにす』

「時間がありません。私は行きます」

『するからこんな事になったんだ』と言いかけたヴェイニの言葉を遮り、テロは空中に界を跨ぐ陣を描く。そして手を唇にあて、呪を唱えた。陣が力を注がれ光輝き、テロを包みこんで行く

「ヴェイニ、あなたはもしもの時の為に残って下さい。魔帝としての役割を…」

『はあ？お前…何ふざけて…』

ヴェイニの言葉が終わる頃にはテロの姿はすでに陣と共に消え去っていた

『お前も天帝だろううがああああああ！！！！』

何も無くなったカティの畑にヴェイニの言葉だけが響き渡った

静かなる怒り（後書き）

ヴェイニは結局お留守番。  
損な役回りは昔から（笑）

## 理由（前書き）

え〜：カティが酷い事になってます。  
苦手な方は読み飛ばして下さい

## 理由

カティは既に大量の血を失っていた。意識を保つ事が出来るのも後少しだと自身でわかっている。マジリユリアは確実に成長し、今や部屋全てを覆いつくしカティも顔がかるうじて出ているぐらいだった。

「あう…の」

「おや？まだ喋る事が出来るのですか？さすが天妃様ですね」

カティの頭上には今にも花開きそうな大きな蕾があり、アウノはそれを見て笑みを一層濃くする。

「こん…な事して…テ…口裏…切って、貴方…の…目…的は何？」  
「裏切り…ですか、そうですね。しかし長い目を見ればこれは陛下の為になります」

「…あ…たしを…殺…す事が？」

カティは何かに必死になっていた。こんな時だがカティの頭の中には妙に冷静な科学者の自分がいて、それはここで死んでしまうだろうと告げていた。だが…彼女は無意味な死は嫌だった。せつかく命を掛けるのだから何か意味のある事を残したい、その気力だけが彼女の意識を保たせている力だった

「…そうですね。天妃様を殺す事も含まれますが、それよりも天界の古い化石のような考えを持った者達を一層する為という方が大きいでしょうか？その為に貴方に生贄になって頂いたんですよ」

「ふる…い、か…せき？」

「ええ。三界全てが安全に行き交うようになった今でさえ、神族



至上主義がのさばっていますからね。筆頭として名を挙げられるのが母の父です。長老という立場にいながら彼は今でも人を蔑み続け、天界と地上の不和を率先して呼び、最終的に陛下達が多大な被害を被っている。ですので今回の天妃誘拐の責任を全て彼に取って頂きます」

「…テミ…セヴァ…長…老」

カティは自分が天界に嫁いだ時に、一番憎悪の視線を向けていた相手を思い出した。形だけの敬意の礼：瞳に宿る侮蔑の感情を隠せない人。色々と（暗殺未遂も含め）仕掛けて来た相手も彼であったとカティは認識していた。

「ええ。彼がどんな無理な事を言ってもあれでも一応力のある筆頭長老なので陛下も理由も無く裁く事は出来ませんでした」

そういえばどの方法でも絶対に尻尾を掴ませず巧妙な手口ばかりを使って来た嫌な相手だった、しかも長老としても人族を苦しめる事しか考えていない身勝手な発言ばかり言っていたと思いついただけにカティの眉間に皺が寄る

「ですが向こうは嫌がるかもしれませんが僕は彼の孫ですからね。今回の件を彼の手によって全て計画された事だと証拠を山ほど残してきましたので言い逃れは出来ません」

「…絶…対に…糾…弾出来…るの？」

「もちろん」

今までの天界での彼の行為も許す事は出来ないが、カティはそれ以上にアウノから聞いた話によって初めてテミセヴァ長老に殺意と言うものを感じた。人への無差別殺人…、きつと叩けばもつと色々な事が出てくるだろう。

「…なら…まあ…いい…わ」

「天妃様？」

「…アウ…ノ、逃げ…て…」

「…何を仰っているのですか？」

アウノはまさかカティから逃げると言われると思わず愕然とした表情をしている。

「貴…方、テロに…殺されるつ…もりで…しょう？」

「……………」

「そん…な事…許さない…」

カティは朦朧となった視線をアウノに向け言葉を続ける

「テロは…きっとあたしが…死んだら…貴方を…殺して自分も…

死んでしまう」

「……………まさか」

カティは確信していた。テロは絶対に自分を追って死を選ぶ事、だから全てに絶望した時も安易に自分の命を断ったり出来なかった。しかも今は考えるだけでも五帝を含めて他にも多大な被害が出る危険性がある。

「…何年…テロの…側にいた…のよ…」

「……………」

でも、もう自分は今更どうしようもない…ならば…

「……………貴方が……………テロの…生きる…理由になるの…。彼は……………き

…つと…何処までも…追い…かけて、貴方を…殺す…わ。絶対に…  
彼につ…かまらない…で逃げ…切って…、それが…貴方の……テロ  
に…対する……罪の…つぐ…ないよ。」

「貴方への罪…とは言わないんですか…」

「…いい？あた…しは…貴…方に殺され…るん…じゃ…ない。こ  
…れが…自分…で選んだ…道よ」

そう…それが例え強制的な事であったとしても、最終的に受入れ  
たのは自分自身だとカティは思いアウノに向かって最後の力を振り  
絞って笑いかけた。

「陛下への…罪の償い。それもいいかもしれませんが…」

「ならば、早く…いき…な…さい」

そう言うとカティの意識は途切れた。蕾はもうすでに花開き始め  
ている

「貴方は神族でも無いのに神のような人だ…。私は選択を誤った  
のかもしれないね」

アウノはそういうと闇に乗じて姿を消した

理由（後書き）

∴カティ死亡フラグが立っています。  
さてさて∴∴どうしようっ？

…冥界？

カティは自分を纏う奇妙な感覚に目が覚めた。まるでフワフワと宙を浮いてるかのような感覚は決して不快ではないが安定感のない心もとない感覚だった。今まで蔦に絡めとられていた身体も解放されていて、思いっきり伸びる事が出来た

「あゝ初めて世界を跨いだ時もこんな感覚だったっけ？蔦も無いし…普通に喋れる…って事はあたしとうとう死んじやったのか…」

カティは目をゆっくりと開けながら呟いた。そして目の前に広がるのは白銀の世界。

「へえ…冥界って…黒じゃないんだ…」

死に纏わる色が黒というのも安直だなあ…と自分の考えを些か訂正し、カティはその場に寝ていたのを起き上がった。

「あ…起きたかの？」

カティの中に衝撃が走った。気配など何も無かったのに、突如として絶世の美女が目の前に現れたのだ。そして、冥界から連想してカティが思ったのは

「え？…えつと…いつひひやいつ…！」

「死神ですか？」と言葉を続けようとした所、思い切り頬を抓られたカティはニコニコと笑いながら頬を抓る力を強める彼女に言葉のチヨイスを間違えたのだと知った

「ふふっ！柔らかい頬じゃの。プニプニしておる」

「は…はほお、ひひゃいれふ」

「我が死神だとは…。ずっと一緒におったのに…酷い話じゃ…」

ようやく解放された頬を両手で摩りながら、カティはその美女が言った言葉を反芻してしまう。

「い、一緒にいた？」

「そうじゃ…其方が天界でいじめられていた時も、絶望の淵に立たされた時も、地上での暮らしに満足している様に見える。実は内心葛藤だらけだった時もじゃ、テロの事が好きで好きで仕方がないのにお…」

「ななっ なっ何でそんな事！」

突然現れた絶世の美女に次から次へと自分の内情を明らかにされてカティは狼狽を隠せなかった。しかもカティが言葉を挟んだにも関わらず「あれもあつたな…」などまだまだ暴露が続いている。しかもテロとの伽の話まで出そうになりカティは慌てて叫んだ

「や、や、やめてえ〜〜〜!!!」

カティは真っ赤になりながら絶世の美女を押さえつけようとし、その美女に触れられない事に気付いた…

「あ、あ、あ、貴方…何？」

「我か？我は…アネルマじゃ」

「アネルマさん…ですか」

カティはその続きを待った。…だが、キョトンとした表情のアネ

ルマに見つめられるだけだった。

「って！名前とかじゃなくて貴方が何者なのか知りたいんですっ  
！！」

「何者と言われると…そうじゃな…我は『天帝の銘』と呼ばれて  
おる」

「……………え？」

カティの頭の中が更に混乱する。カティの思考内では『天帝の銘』  
は天妃の証であり、力を有していてもそれはテロの波動から発生し  
た物と考えていた。まさか銘が生物であったと説明された覚えもな  
ければ今までそれを感じた事も無かった

「テ、テ、テ、テロオオオオオ！！！！」

とんでもない物を人の身体に入れやがって…とカティが怒りをメ  
ラメラと燃やしているとアネルマがカティの額を持っていた扇子で  
ぺちつと叩いた

「これこれ天帝に間違った怒りを抱くでない。現天帝も我が銘だ  
とは知らぬのだから」

叩かれた額を摩りながら「そちらからは触れられるんですね」と  
カティは言ったがアネルマは無視して話を続ける

「さて、無駄な話をしてる暇はないのじゃ」

カティはそれは「貴方じゃ…」と言いかけたが、身の危険を感じ  
てやめた。

## 希望

優雅なティーセットが並ぶテーブル。カティは喉まで出かかつて「急いでるんじゃない」という言葉を必死に止め、目の前でこれまた優雅にお茶を飲むアネルマを見ていた

「カティどうした？美味しいぞ？」

「は、はあ…頂きます」

ここがどこかもわからず事情が掴めないカティには言われるがままにお茶を飲むぐらいいしか出来る事は無かった。言われたとおりカップに口を付けた途端懐かしい香りがカティの鼻に届いた

「これ…」

それはカティがいつも畑で入れていたお気に入りのハーブティだった。

「この茶はよい。気分を安定させて脳をはつきりと動かす事が出来るからのお」

「……うつく」

このお茶をカティがテロや五帝と飲んだのはそんなに昔の話じゃない。あれが当たり前の日常だとカティはそう考えていた。今になってそれがどれほど幸せだった時間で、取り返しのつかない日々だったかと考えると涙が次から次に溢れてくる

「カティ…」

「す、すみません…何か色々思い出しちゃって…」



アネルマはカップをソーサーに戻すと、そのままカティがカップを握る手をそつと上から覆った

「…そなたは既に死んでおる」

カティはあのアウノと話した時に死を覚悟していた。いや、そのつもりだった。だがそれを誰かに告げられたショックは抑えられる物ではなく、手が震えるのを止める事は出来なかった。頭の中に浮かぶのはテロとの思い出ばかりで、そんな中カティが願うのは「どうか…彼が生を選んでくれますように…」それだけだった

「私は…どうなるのでしょうか？」

「うむ。質問を質問で返すのは作法に反するがあえて問おう。そなたはどうしたい？」

『死んだ』後で何が出来るというのか…生まれ変わりなのだろうか？カティはアネルマの言った言葉が上手く処理出来ない。そんな戸惑いを察しアネルマが言葉を続ける

「人としてのカティは死んだ。じゃがまだ生きておる」

「よく…意味が…」

「『魔薬』あれを飲んだ瞬間に、其方の魂魄は完全なる人の部分と銘を宿した部分とに二分され一方に天帝の銘を封じ込めたのじや。だから表に銘の力が出る事はなくなった。凄い物を作ったのお…こんな事になったのは我が銘になってから初めてじゃった。まあ人に宿されたのも初めてじゃがのお〜ふおふお！」

アネルマは重要な事を語っているとは思えない軽い口調で言葉を進めていく

「多分波動の力を抑え込もうとして魂魄自体を二分してしまうんじゃないかな…。ちなみにしばらくするとこれは元に戻る様じゃ。昔飲んだテロの魂魄は一つに戻っておるからのお。それが其方が言っておった効力が切れるということじゃろなあ…。で、其方はアウノじゃったかの…。あれに会う直前に薬を飲んだ事によって綺麗に魂魄が二分されていた状態じゃった」

「…つまり、私が死んだのは一方の魂魄だった…？」

カティの言葉にアネルマは肯定の言葉は口にせず、にっこりと微笑んだだけだった

「…じゃあ…私…」

カティは次の言葉を期待してしまって怖くて口に出せない。アネルマはそんなカティにゆっくりと頷きながら言った

「生き返る事は可能じゃ。ただし」

カティは何事も受入れる覚悟でアネルマの次の言葉を待った

## 殺人茶

カティはこれ以上ないほど心拍が上がっていた。やはり死を覚悟したとはいえ「生き返る事が出来る」という言葉はまるで奇跡のよ  
うな言葉だった。現世に未練が無かったわけではない。ただ選択肢  
がそれしかなかったから死を受入れた。例えどんな事があるうとカ  
ティはテロの元に戻りたいと願う

「ただし…今其方に残った魂魄は我と同化するに耐ええた物のみ  
じゃ。つまり其方は生き返っても人に戻る事は無い」

「人…じゃ、無くなる？」

カティは頭で幽体などの心霊的な物を想像してしまふ。地上の科  
学者ならばそんな物は存在しないと切り切る存在だが、カティは科  
学者とは言え人外の者と数多く知り合い、幽体に知り合いは居なく  
てもそれも存在するのではないかと考えていた。ただそれでは生き  
返るとは言わないのではないのか？などとブツブツ呟くカティに今  
度は頭に縦にアネルマの扇が入った。

「いった！」

「これ！また勝手に推測しおって…、科学者という物も困ったも  
のよのう…」

「す、すみません。…それが仕事だった物ですから…」

「ちゃんと最後まで話を聞きゃ」

「……はい」

カティはとりあえず落ち着こうと思ひ、ハーブティが入ったカッ  
プを手にとって口にしたが…その瞬間…

「ぐはあっ!!」  
「なっなんじゃっ!!!!」

カティは想像の味との余りのギャップにお茶を吐き出していた。カティのお茶と香りが一緒のそれは似た部分は香りだけで凄まじく不味い代物だった。口の中には馴染みの薬草や香草しか感じ取れないが、いつもと違い酸味・苦み・エグミが見事に調和をとり、カティの意識を奪おうとその力を発揮していた

「な…何で…こんなに不味いんですか…」

「何？其方がいつも飲んでおつたのはこの味ではないのかえ？」

「こんなの皆に出したら…確実に誰か死にますよ…。あっ！あたし死んでるから飲んででも平気なんですかね…」

「入れ方が不味かつたのかえ…其方と意識と知識の共有はしておつても、味覚は共有しておらぬからのお」

どうやって入れてもこんな殺人茶にはならないはず…とカティは額から次々と流れ出る脂汗を手で必死に拭っていた。どんな調査をしてもこんなに凄いお茶はあたしには作れないとカティは思った。しかし…「突然変異」という言葉が頭に浮かび、先程優雅にこのお茶を飲んでいた目の前のアネルマにカティはちよつとした疑問を抱く。

「あの…そちらのカップを飲ませて頂いて宜しいですか？」

「良いぞえ」

「では……………ぐっはう！」

もしかしてこちらのカップの中身はまともなものかも…と飲んだ事をカティは激しく後悔する事になった。気管が休息に窄められ息が苦しくなる。二度の臨死体験はなかなか貴重な経験だが、余り回数

を重ねたいとは思えない物だった

「ぐつ…す、すみません…水を…」

「ほれ、飲むがよい。そうか…この茶は不味いのじゃな…」

そう言つて、再びカップに口を付け平然と飲みほしたアネルマにカティが真からの恐怖と尊敬の意を抱いたのは間違いなかった

そしてカティは与えられた水を全て飲み干し、まだ口が痺れ違和感があるものの何とか息が出来る様になった。しかしカティは「あの香りのお茶がこんな味になるなんて…悲し過ぎる」と土下座しアネルマに言つた

「私にお茶を入れさせて下さい」

きよとんとしたアネルマは「頼んだえ」と扇を広げてにつこり笑つた。カティは立ち上がると側にあつたお茶セットを載せたワゴンに近づき、そこにある見慣れた葉や花に「何故これが…」と首を傾げながら、畑でいつもしていた様に手際良くお茶を入れる

立ち上る湯気にいつもの香りが混ざるが、香りだけでは安心出来ないカティは少し自分のカップに注ぐと恐怖もあつたが目をつぶつてカップのお茶を一気に飲んだ

「…良かった。いつもの味だ」

安堵の息を吐きながらカティはアネルマの分もお茶を注ぎ、テーブルに運んだ

「どつぞ…」

「うむ。頂くえ」

コクンと喉をならして飲むアネルマにカティはまるで審査されるような感覚に陥った

「美味しいのお。そうか…このような味じゃったのか…」

「…はい。私の記憶では…」

「そうか…やはり私の想像だけではちと難しかったのお…」

「…想像？」

カティは何かその言葉に科学者の嗅覚が鳴り、思わずアネルマに問いかけていた

「想像とはどういう事ですか？」

「この白の世界は我が住まう其方の中の精神世界じゃ、例えばこの茶も我が違う味と思えばそのように変化する。そういう不安定な空間なのじゃ」

「…精神世界」

つまりカティが入れたお茶もカティがそのお茶の味を覚えているからその味になっただけだと説明されカティは思わず目の前のお茶に違う味を想像して飲んでみた

「…ほんとだ…コーヒーに味が変わってる…」

カティがその不思議な現象に意識を奪われていると、目の前のアネルマが盛大にお茶を吐き出していた

「な、な、何じゃこれはっ！！苦い！苦いぞえ！！」

携わった物の思考に変換されるのかとカティはその様子を見ながら、なるほどなるほどと繰り返し頷いていたのだった

## 正体

カティは口を濯ぎ続けるアネルマにもう一度口直しのお茶を入れなおし、自分の分も入れ椅子に座りなおした。

「…先ほどのまさには殺人茶じゃの」

カティはアネルマが飲んだのはあくまでコーヒーであって、先ほど自分が飲んだお茶の方がよほど殺人茶だと思ったが口には出さなかった。カティはただ静かに入れなおしたお茶を飲み、アネルマが先ほどの会話を続けるのを待った。アネルマも落ち着いたのでお茶を口にし、そしてぼそつと言葉を続けた

「人では無くなる…怖くないかえ？」

カティはすぐに返答する事が出来なかったが少し考えゆくりと首を横に振って言った

「怖くないと言えば嘘になります…怖いですから」

カティが一番怖いのは元の世界に戻って自分がどうなるのかを想像出来ない事だった。ただ漠然と人でなくなるとい事だけを告げられ、その事に恐怖を感じないわけがない

「でも…多分私の恐怖以上に怖い思いをしてる人がいますから…」

今頃カティの遺体と対面しているはずのテロを思う。ただ呆然と目の前の現実を受け止めようと頑張ってる姿を想像すると胸が痛む

「それに比べたら私の恐怖は何かありません。で、その人の恐怖も取り除けたら皆ハッピーでいいんじゃないでしょうか？」

「軽いのお……」

「世の中先を深刻に考えていい事なんてないですよ？今をどうするかです！」

「科学者とは思えん言葉じゃの……」

「私、感情と思考は別問題なんで！じゃないと天帝の嫁なんて出来るわけないですよ」

カティは生き返ると返事した覚えも無かったが、アネルマと話している間に自ずと「どんな状況でも生き返る」という答えが導き出されていた。昔から実験でも考えてる間が長く、実験段階になるといつも行動が早かった事を思い出してカティは自分で苦笑する。今回だつて同じ事だとカティは思い、答えが出ると後は実行するのみ！と覚悟も決まつてカティの表情はすつきりとし、笑みさえ浮かんでいた。そんなカティを見守りながらアネルマの顔にも同じ笑みが浮かんでいた

「よしっ！がつつり『生き返り』お願いします！」

カティはテーブルに手を着くとアネルマに向かって頭を下げた。そんなカティにアネルマは苦笑を浮かべる。これからカティに行う行為に対してアネルマ自身に迷いがあった。本来であれば自分が憑依した体が死んだ時点で天帝の身体へ戻るの通常だった。ただアネルマはカティと過ごす中で今までの天妃とは違う何かを感じ、それが心地よかった。もう少しこの者と共に過ごす事もよいのでは？という思いが芽生えていた。ただし生き返らせる為には自分の力が必要で、それは一個人に対しては余りにも強大な力で、その力を与えていいのかどうか…直接カティと対峙して見極める必要があると感じたのでこの白銀の世界を用意した。そしてアネルマは選択は正し



かったと今、カティを目の前にして思う

「其方はやはり面白いのお」

「…褒められてるんでしょうか？」

「どうかのお？ 我に好かれて厄介かも知れんのお」

ふおふおと笑うアネルマを見ながら、カティも久しぶりに笑い声を上げた。そして暫く二人で笑いあった後、アネルマが笑いを収め真剣な顔でカティを見つめる。そこには今までの空気と違い凜とした女性が立っていた

「カティ。我の名前はアネルマ・カステヘルミ・タイナ」

カステヘルミという名がカティの記憶にあつた。それは幼少の頃に母親に読んでもらった本に出てきた主人公の名前。この世界の始まりを記した神話

「……そ、創世記？」

「創生神カステヘルミ…懐かしい名じやの…」

話の中でしか存在しなかった者が目の前にいる現実、そして余りにも想像を超えた存在にカティの思考はしばらく使い物にならなくなった。

## 創生

アネルマの思考が記憶をどんどん遡る。それに合わせて白銀の世界が一掃され、次いだ世界は無の世界だった。闇でさえもない感覚、何物にも例える事が出来ないその世界は、何かが存在する事が間違っていると感じさせる。そしてカティは急に自分を取り巻く世界が変わった事に驚いたが世界が移動された時に起こる目の回るような感覚が無かったので、ここが同一の世界だと認識した。

「…やはり、其方は変わっておるのお」

「え？」

「ここは、私の初めて降り立った場所じゃ。何も無い世界…架空といえ、この世界に立って自我を保てる其方はやはり少し変じьяのお」

「……………はは」

褒められているのか、貶されているのか判断し難い状況にカティは苦笑いを浮かべるしか出来ない。

「…まあよいわ。ここで我らは遊びを始めたのじゃ」

アネルマの言葉と共に変わる風景にカティは目を奪われる。最初に現れた小さな茶色の塊はまるで粘土のようで、それがあつという間に平たく広がった。

「土を捏ね大地を作り続け、眠くなつた時に欠伸と共にでた涙によつて海が作つたのじゃ。自分の髪を切つて、成長という力を与えて大地にさせば、大樹となつたわ。せて、ここで問題じゃ、この世界に何が足りぬと思うかのお？」

いつの間にか森の中に立つカティ。原始の世界を目の当たりにして圧倒されている彼女にアネルマは問うた。それは今の世界と同じようで、何か違和感のある世界

「生き物…生物が……いない？」

「そう。正解じゃ」

アネルマが手を『パンツ』と高らかに打つとそこに奇妙な物体が現れた。

カティにとって突然現れたそれは何とも形容し難い、足がたくさんあり、顔は熊のようで…ただ目などがはつきりしない不気味な存在としかわからなかった。カティがちらつとアネルマを見ると何故かキラキラと目を輝かせ彼女を見ていた

「……た、蛸？違うな…く…く、熊？せ、生物？」

カティの言葉と共にアネルマの眉間に皺がより始め、それを見てカティの額にも汗が浮かんでくる

「……………エイリアン」

「っ！！我の力作に何という事言うのじゃっ！！其方達の祖先やつたやも知れぬ我の力作にっ！！」

アネルマの言葉に今度はカティが驚愕した。まさかこのエイリアンが人の祖先だなんて…と言葉にならないカティにアネルマが「ふんっ」と鼻を鳴らした。そして彼女はもう一度手を高らかと鳴らした。

「あ…」

カティの目の前に現れたのは凶鑑などで見たことがある、今ではもう絶滅してしまった生物達。

「もう一人の創生神が創ったものじゃ……」

カティはもう一人の創生神の手先の器用さに心の底から感謝した。いつの間にか模型のようだった生物が動き出す。

「長い間、この空間は我達のお気に入りじゃった……。そして我らの言葉を聴ける神族を創ると、ある日我らの声が直接聞こえない人族が生まれたのじゃ」

「人は……偶然の産物だったんですか……」

「まあ……そうとも言つのお。そして我らの声が届かぬ人族は争いを始め色々な物を傷付け出した。困った我らはその力を抑制させる為に魔族を創り、そして神族にさらに力を与え、人を支配させた」

「………なんだか……す、すみません」

争いを続ける人族。耳の痛い話にカティは謝るしか出来なかった。

「別に人程度が傷つけても何ともなかったのじゃが……問題は力を与えた神族が暴走を始めてのお……世界を一度崩壊させかけよつてのお」

「………」

「今度は神族を制御する為に、グレイアスは天帝を創り、そやつと勝手に同化したのじゃ……」

「グレイアス？」

「……もう一人の創生神の名前じゃ」

その紹介が今！？とカティは思ったが口には出さなかった。

「グレイアスによって世界は安定されたが…我は一人になったのじゃ…。それは果てしなくつまらない世界でのお。我も銘となって地上に降りることにしたのじゃ。これが我が銘になった経緯じゃ」

カティはほおくと頷いていたが「はっ」と気付いた事を口に出さずにいらなかった

「あの…私が生き返ると…何の関係が…」  
「特に無いのお」

その返事にくつとカティの膝が折れる。だが続けられたアネルマの言葉にカティは今度は背筋が寒くなったのだった

## 始動へ向けて

アネルマの次の言葉をカティはただ黙って聞いた。

「今見たこのすべての力が其方の力となるのじゃ。世界を創生出来る力…どうじゃ？」

「どうじゃと言われても…」

カティは今見た映像が自分の力になると言われても余りにも現実離れしすぎていてやはりおとぎ話にしか感じられなかった。

「力の使い様によっては全ての世界を容易く破壊してしまう力じゃ。今まで数多くの妃がおったが、この力を授けたことは無い。その資格を持つものもおらんかったしのお。さて、最後の質問じゃ。この力を其方は使うことはないかえ？」

アネルマの質問にカティは即答した。

「無理です。使います。がつつり手に入れたものは使います」

答えを聞いたアネルマが剣呑な瞳を扇の下からカティへ向けた。

「其方、生き返りたくは無いのかえ…」

「そりゃもちろん、生き返りたいですよ。でもここで私が『力を使わない』と言えばそれは嘘になりますから、そんな嘘をつく人間の方が力をする資格はないと判断したから正直に答えただけです。それで生き返れないのであれば、他の方法を探します」

創生神ともなれば自分の浅はかな嘘など簡単に見破られる事など

すぐにわかった。その上でアネルマはカティに質問しているのだと

「生き返ってやりたい事にこの力があれば助かるんです」

「…ほお？」

「とりあえずテミセヴァ長老ぶつとばします。ふふ…私怒らせた  
ら怖いんです。あんの神族至上主義め」

カティの据わった目を見てアネルマの顔がひくついた。

「殺すのかえ？」

「…殺す？いいえ。裁くのはテロに任せます。ただものすんごく  
狡猾い神なんで今までの悪事の証拠が何も出てこないですよね、  
死んでる方が相手油断すると思うんで、その調査を極秘でします」

「そのどこに我の力があるのじゃ…」

「ふふ…あの神族至上主義がですよ！人間のあたしが創生神の力  
を手に入れたなんて知ったら…絶対呆然としてその後、悔しがるじ  
やないですか…その顔が見たいだけです」

アネルマは自分が想像した力の使い方のどれよりもちっちゃいそ  
の使い方がくつと膝が折れるのを感じた。

「…アウノはどうするのじゃ？」

「アウノ？アウノがどうしたんですか？」

自分が殺された事などすでに過去の話なカティにアネルマはにや  
りと笑う。カティの質問には答えずアネルマは先程カティが言った  
言葉に興味を引かれた

「生き返れなければ他の方法とは…どうするつもりじゃったのじ  
ゃ？」

「あゝ…それは…」

カティは、もしアネルマに生き返らせて貰えなくても今までのアネルマとのやり取りで魂の半分が生きているのであればここで生き返りを研究する価値はあるはずだと思っていた。その時にはアネルマに頼んでこの空間だけを残して貰い、ここで研究をしたい！とその事を話すとアネルマは大爆笑している

「ひいひい…そ、そ、其方我を殺す気が…笑い転げて死ぬかと思たえ…」

「……………」

真面目に答えた質問で爆笑をされても…とカティは口の端が引きつる複雑な顔を返した。その間も笑いが我慢出来ないのかアネルマはずっと笑い続けている。暫くして、ようやく呼吸が落ち着いてきた頃を見計らって扇を畳み、カティへ向けた

「では、生き返らせるかのお」

そう言つと扇から熱を帯びた光線の様な物がカティに注がれる。そうして光が消えた時にはカティの胸の辺りがほんのりと熱を帯びた状態となっていた

「……………」

「ほんとに生き返らせぬとも思たか？言葉にした約束はきちんと守るぞえ。後は天帝の力を待つのみじゃ」

「…テロの？」

死んでからもテロの力が必要になると思ってたカティは、幾つもの疑問符を頭に浮かべる。口に出さなくてもそれを察したア



ネルマは

「其方の身体の銘の力は魔薬によって抑え込まれておるのじゃ…その力が収まるか天帝が無理に銘の力を発動させぬ限り中から出来る事には限りがあるのじゃ…」

「じゃあ…テロが動かなくても待てばいいんですね」

「それがそうもいかん。魔薬の効力が切れるのは約1年かかる。

銘の力が抑えられてる以上、半魂が死んでいる状態では其方の肉体が持たん」

「生き返ってもゾンビってシャレになんないですよね…」

「我が新たな肉体を作ってもよいか…」

その瞬間カティの頭に先程のエイリアンが浮かび、思い切り頭を左右にふった。言葉にならない恐怖であった

## 混乱（前書き）

い テロsideの話です。多少時間軸のずれがありますがご了承ください

## 混乱

テロは見事に咲き誇る大輪の花を見ても何も心が動かされること  
が無かった。なぜなら彼の瞳にはその花は映っておらず、その瞳の  
先に映るのは花に捕らえられた愛しい妻の姿だけだった

「カ…ティ」

テロは眠るような彼女に声をかけ、起きてくれる事を願った。何  
度も目にした寝起きが苦手な彼女が「うゝ」と唸りながら目を開け  
る姿を見せて欲しいと心の底から思った

「カティ…ほら…いくら植物が好きだからと言って、そんなベッ  
ドは私は嫌ですよ」

テロは一步…カティへ近づくとその顔色に目を逸らす

「やっぱり調子が悪かったんでしよう。天界に戻りましょう？今  
度は私が全部受け止めますから」

テロは返ることの無い問いかけに、奥歯をかみ締める。すでに頭  
では理解している事に心がついていかない。手を伸ばすと触れられ  
る距離になっても恐怖で触れる事が出来ない。カティ自身を目の前  
にした感情はカティの畑での暴走など些細な事に感じられる程の物  
で、一瞬で自分の身を焼いてしまいたい衝動が次々とわき起こる。  
それを止めたのはカティの表情だった

「とび…して…」

テロが見たカティの表情は満たされていて、まるで微笑んでいるかのようにだった

「どうして、一人きりなのに…笑って…るん…ですか…。私が側に居ないのに!!どうして一人で逝ってしまったのに笑ってるんです!!!」

テロがきつく握りしめた拳をカティに寄生した蔦にぶつけると、蔦はみるみるうちに茶色くなり枯れ落ち、粉碎して消えた。カティの体内に伸びていたそれも枯れ消え、支えを失ったカティはテロの腕の中に倒れ込んだ。テロは自分の外套をカティに着せるとそっとカティを床に下ろした

「カ…ティ…」

「カ…ティ…、カティ…：…カティッ!!!」

テロはカティの肩に手を置いてその名を呼びながら彼女を揺さぶり続けた。彼女が再び動く事が無い事を認める事が出来ずに長い間それを繰り返した。

そして、突然その手を止めた

「…カティ。この世界に一人で生きるのは…私には出来そうになり…全てが終わったら私は…君の側に行きたい。許してくれますよね

…」

テロはそう言うとカティを抱き上げ、転送の呪を唱えた。

\*

同じ時、天界ではテロが焔で暴走した波動の余波を受けカンデラとシルヴォが倒れ込んでいた。テロが地上から時の歪みへと移動したおかげで五帝の負担が一気に減り、今は二人が寝ている場所に他の帝も揃っていたが、皆額に皺を寄せ、難しい顔をして立っていた。そんな中沈黙に耐えられず口を開いたのはアデライドだった

「さっきのテロ様の波動といい…その後は何処かへ転送された事といい、一体地上で何が起きているのよっ！！！」

「落ち着けアデリー」

「マティアスっ！貴方カティの事が心配じゃないのっ!？」

「落ち着けと言っている」

アデライドは冷静なマティアスの言葉の下で彼自身もかなりの抑圧をしている事を感じ取り、ぐつと唇を噛むとぷいと帝から顔を背けた

「…先程のテロ様の波動は何らかの力によって地上への影響は皆無だったが、天帝が不在の今、五帝が地上の安定を取らねばならない。しかもカンデラとシルヴォは暫く使えない。我ら三帝だけで行わなければならぬんだ。他の事に力を割いてる余裕はない」

「多少の無理をすれば出来るかもしれないじゃない!!」

「いつテロ様が戻るかもわからないだぞっ!!カティが戻った時に地上が無くなっていたなどと言う状況を作りたいのかっ!!!!」

段々熱くなる二人を止めたのはやはりウーゴの一言だった

「二人とも好きな様にすればいい。俺は俺のやるべき事をする」

その言葉に二人ははつとなり、そして自分自身の立場を思い出した。世界は地上だけでは無い。二人は地上にはかり目がいつており、天帝が居場所不明の不在という事は天界さえも混乱に陥る可能性があるという事を見失っていた

「悪かったわ…」「悪かった…」

二人から同時に謝られたウーゴはにっこり笑みを浮かべると二人に言った

「地上の事はマティアスの言う通り重要。そしてアデリーの言うカティの行方も調べないとテロ様の居所もはっきりしない…根本的な解決はテロ様の行方なんだからこれもまた重要。そしてさっきからいるべきはずの者がこの場に居ない事がきつとそれらを紐解いてくれる鍵だと俺は思う」

「アウノ…」

「地上の安定は俺だけで数時間耐える。その間にアウノの居場所を捜せ」

「わかった」

そしてアデリーとマティアスが波動を使おうとした瞬間とテロの執務室から天帝の波動が流れ込んでくるのは同時だった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5325r/>

---

カティの畑

2011年8月4日04時12分発行